

ISSN 1344-8692 Vol. 41 No. 168

伝 熱

*Journal of the Heat Transfer Society of Japan*

伝熱学会 40 周年記念号シリーズ

< 歴代会長特集号 >

2002.5

# 「伝熱」原稿の書き方

## How to Write a Manuscript of Dennetsu

伝熱 太郎 (伝熱大学)  
Taro DENNETSU (Dennetsu University)

### 1. はじめに

以下の注意事項に留意して,原稿を作成すること.

### 2. 「伝熱」用原稿作成上の注意

#### 2.1 標準形式

原稿は Microsoft Word 等を用いて作成し,図や写真等は原稿に張り込み一つのファイルとして完結させる.原稿の標準形式を表1に示す.

表1 原稿の標準形式

用紙サイズ	A4 縦長(210mm×297mm), 横書き
余白サイズ	上余白 30mm, 下余白 30mm 左余白 20mm, 右余白 20mm
タイトル	1 段組, 45mm 前後あける (10 ポイント(10×0.3514mm)で 8 行分)
本文	2 段組, 1 段 80mm, 段間隔余白 10mm
活字	10 ポイント(10×0.3514mm) 本文 (Windows) MS 明朝体 (Macintosh) 細明朝体 見出し (Windows) MS ゴシック体 (Macintosh)中ゴシック体 英文字・数字 Times New Roman または Symbol
1 行の字数	1 行あたり 23 文字程度
行送り	15 ポイント(15×0.3514=5.271mm) 1 ページあたり 45 行 ただし, 見出しの前は 1 行を挿入

#### 2.2 見出しなど

見出しはゴシック体を用い,大見出しはセンタリングし前に 1 行空ける. 中見出しは 2.2 などのように番号をつけ左寄せする.見出しの数字は半角とする. 行の始めに,括弧やハイフン等がこないように禁則処理を行うこと.

#### 2.3 句読点

句読点は, および .を用い,、 や .は避けること.

#### 2.4 図について

図中のフォントは本文中のフォントと同じものを用いること.

#### 2.5 参考文献について

##### 2.5.1 番号の付け方

参考文献は本文中の該当する個所に[1], [2,4], [6-10]のように番号を入れて示す.

##### 2.5.2 参考文献の引き方

著者名, 誌名, 巻, 年, 頁の順とする. 毎号頁の改まる雑誌(Therm. Sci. Eng.など)は巻-号数のようにして号数も入れる. 著者名は, 名字, 名前のイニシャル. のように記述する. 雑誌名の省略法は科学技術文献速報(JICST)に準拠する. 文献の表題は省略する. 日本語の雑誌・書籍の場合は著者名・書名とも省略しない.

#### 参考文献

- [1] 伝熱太郎,伝熱花子,日本機械学会論文集 B 編, 80-100 (1999), 3000-3005.
- [2] Incropera, F. P. and Dewitt, D. P., *Fundamentals of Heat and Mass Transfer*, John Wiley & Sons (1976).
- [3] Smith, A. et al.,*Therm. Sci. Eng.*, 7-5 (1999), 10-16.
- [4] 山田太郎, やさしい伝熱, 熱講社 (1980).

原稿作成用のテンプレート (MS-WORD) は下記の伝熱学会のホームページよりダウンロードできます.

伝熱学会のホームページ <http://www.htsj.or.jp/>  
または学会誌「伝熱」のホームページ  
会告・記事のテンプレート

[http://www.htsj.or.jp/den\\_guide.html](http://www.htsj.or.jp/den_guide.html)

転載許諾願申請フォーム

<http://www.htsj.or.jp/reqcopy.html>

# 伝 熱

## 目 次

### 歴代会長からのメッセージ

歴代会長特集号の発刊にあたって .....	河村 洋 (東京理科大学) .....	1
歴代の会長・副会長 .....		2
第1期会長 小林 明 .....		3
.....		
.....		
第40期会長 藤田 恭伸 .....		42

### 追悼

新井紀男 教授を偲んで .....	加藤 征三 (三重大学) .....	43
追悼 笹口健吾助教授 .....	井村 英昭 (熊本大学) .....	44

### 支部活動報告

東海支部活動報告 .....	桑原不二朗 (静岡大学) .....	45
東北支部活動報告 .....	橋爪 秀利 (東北大学) .....	46

### 行事カレンダー

.....	47
-------	----

### お知らせ

「伝熱」会告の書き方 .....	49
事務局からの連絡 .....	50
日本伝熱学会入会申し込み・変更届用紙 .....	52
日本伝熱学会賛助会員入会申し込み・変更届用紙 .....	53

### インターネット情報サービス

<http://www.htsj.or.jp/>

最新の会告・行事の予定等を提供

[htsj@asahi-net.email.ne.jp](mailto:htsj@asahi-net.email.ne.jp)

事務局への連絡の電子メールによる受付

**Journal of The Heat Transfer Society of Japan**  
**Vol.41, No.168, May, 2002**

**CONTENTS**

**< Message from Successive Presidents >**

Special Issue on Record of Successive Presidents of HTSJ

Hiroshi KAWAMURA (Tokyo University of Science) .....	1
List of Presidents and Vice-Presidents of HTSJ .....	2
1 <sup>st</sup> President: Akira KOBAYASHI .....	3
.....	
.....	
40 <sup>th</sup> President: Yasunobu FUJITA .....	42

**<Memorial Tribute>**

A Reminder of Our Deceased Friend: the Last Prof. Norio ARAI

Seizo KATO (Mie University) .....	43
In Memoriam of Associate Professor Kengo SASAGUCHI	
Hideaki IMURA (Kumamoto University) .....	44

**<Report of Branch>**

Report of Tokai Branch

Fujio KUWAHARA (Shizuoka University) .....	45
Report of Tohoku Branch	
Hidetoshi HASHIZUME (Tohoku University) .....	46

<b>&lt;Calendar&gt;</b> .....	47
-------------------------------	----

<b>&lt;Announcements&gt;</b> .....	49
------------------------------------	----

歴代会長特集号の発刊にあたって  
- 我が国伝熱研究の「人」の記録として -  
*Special Issue on Record of Successive Presidents of HTSJ*

日本伝熱学会副会長（編集担当） 河村 洋（東京理科大学）  
*Hiroshi KAWAMURA (Tokyo University of Science)*

---

本学会は 今期、伝熱研究会の発足から起算して、創立40周年を迎えました。そのため学会としては、10年間を一つの節目として、この期間の伝熱研究の進歩を記録しておくことが重要であるとの結論に至りました。そこでまず、この10年間に進展が大きかったと思われるいくつかの研究分野について、その進展を振り返り記録する特集号を、前号と前々号に組み、すでにお届けをさせていただきました。これらを見ますと、たしかにこの10年間の、我が国、あるいは世界の伝熱研究の進展に関する貴重な記録となっております。ご多忙な中をご執筆いただきました各位には、あつく御礼を申し上げます。なお、10年前の30周年にも同様の意図で特集が組まれておりました、これらを蓄積していくことにより、世界的にもユニークなわれわれの伝熱学会が、その役割の一つをはたしてゆけると存じます。

本号で企画させていただいたのは、歴代会長の記録であります。上記の研究特集が研究内容の記録であるとし、こちらは、伝熱研究に携わった「人」の記録であるといえます。40年という歳月は、個々の人間の一代よりは短い期間ではありますが、職業人としては、ときに三世代にわたる期間であります。そのためこの機会に、歴代会長のお名前をお借りして、我が国の伝熱研究に携わった「人」の記録を残させていただきたいと考えました。このような企画にはおしかりを受けそうな先生のお顔も浮かびましたが、上記の意図をご理解いただけるものと確信してお願いを致しました。さいわい、すべての歴代会長から、あるいは物故されている場合はお近いご関係にあられた方々から、貴重なご提言やご回想をいただくことが出来ました。ここに、あつく御礼を申し上げます。また、大半のお写真もそろえることが出来たのは、大変ありがたいことでした。私も、お名前だけでお顔を存じ上げなかった何人かの先生方のお顔を、今回はじめて拝見しました。お顔を知ることにより、その方のご研究を、より深く理解できる気がいたします。

本号に寄せられた文章を拝見しますと、伝熱の研究に携わってこられた先生方が、いかに伝熱研究を大切にされ、それをときにきびしくときに暖かく伝え育てようとして来られたかが強く感じられます。その意味で、今回の特集は、期せずして、我が国の伝熱研究の「心」の貴重な記録にもなっているのではないかと思います。

最後に、これらの特集記事を企画され、労をいとわず多数の記事やお写真の収集にあたられた瀧本編集部会長（金沢大学）をはじめとする編集委員各位に心からの感謝を申し上げます。

歴代会長・副会長

期(年)会 長	副会長		
1 (S37)小林 明 (豊田中研)	橘 藤雄 (東京大学)		
2 (S38)拔山四郎 (東北大学)	橘 藤雄 (東京大学)		
3 (S39)矢木 栄 (東京大学)	内田秀雄 (東京大学)		
4 (S40)棚沢 泰 (東北大学)	内田秀雄 (東京大学)		
5 (S41)西脇仁一 (東京大学)	甲藤好郎 (東京大学)		
6 (S42)菅原菅雄 (京都大学)	水科篤郎 (京都大学)	甲藤好郎 (東京大学)	
7 (S43)山梔 清 (宇部高専)	佐藤 俊 (京都大学)	植田辰洋 (東京大学)	
8 (S44)坪内為雄 (東北学院大)	西川兼康 (九州大学)	植田辰洋 (東京大学)	
9 (S45)橘 藤雄 (東京大学)	一色尚次 (東京工業大学)	国井大蔵 (東京大学)	
10(S46)斎藤 武 (北海道大学)	小笠原光信 (大阪大学)	国井大蔵 (東京大学)	
11(S47)小笠原光信 (大阪大学)	頼実正弘 (広島大学)	平田 賢 (東京大学)	
12(S48)内田秀雄 (東京大学)	前田四郎 (東北大学)	平田 賢 (東京大学)	
13(S49)水科篤郎 (京都大学)	牧 忠 (名古屋大学)	平田 賢 (東京大学)	
14(S50)杉山幸男 (名古屋大学)	甲藤好郎 (東京大学)	一色尚次 (東京工業大学)	
15(S51)西川兼康 (九州大学)	泉亮太郎 (名古屋大学)	一色尚次 (東京工業大学)	
16(S52)佐藤 俊 (京都大学)	武山斌郎 (東北大学)	片山功蔵 (東京工業大学)	
17(S53)森 康夫 (東京工業大学)	長谷川修 (九州大学)	片山功蔵 (東京工業大学)	
18(S54)甲藤好郎 (東京大学)	岐美 格 (京都大学)	棚澤一郎 (東京大学)	
19(S55)国井大蔵 (東京大学)	関 信弘 (北海道大学)	棚澤一郎 (東京大学)	
20(S56)小林清志 (静岡大学)	山家謙二 (I H I)	秋山 守 (東京大学)	
21(S57)青木成文 (東京工業大学)	大谷茂盛 (東北大学)	秋山 守 (東京大学)	
22(S58)植田辰洋 (東京大学)	松本隆一 (神戸大学)	齋藤孝基 (東京大学)	
23(S59)武山斌郎 (東北大学)	藤井 哲 (九州大学)	齋藤孝基 (東京大学)	
24(S60)岐美 格 (京都大学)	平田 賢 (東京大学)	小竹 進 (東京大学)	
25(S61)長谷川修 (九州大学)	堀 雅夫 (動燃)	小竹 進 (東京大学)	
26(S62)大谷茂盛 (東北大学)	石黒亮二 (北海道大学)	越後亮三 (東京工業大学)	
27(S63)平田 賢 (東京大学)	藤掛賢司 (豊田中研)	越後亮三 (東京工業大学)	
28(H 1)藤井 哲 (九州大学)	相原利雄 (東北大学)	黒崎晏夫 (東京工業大学)	
29(H 2)石黒亮二 (北海道大学)	鈴木健二郎 (京都大学)	黒崎晏夫 (東京工業大学)	
30(H 3)小竹 進 (東京大学)	架谷昌信 (名古屋大学)	井上 晃 (東京工業大学)	
31(H 4)藤江邦男 (新明和工業)	伊藤猛宏 (九州大学)	井上 晃 (東京工業大学)	
32(H 5)棚沢一郎 (東京大学)	坂口忠司 (神戸大)	仲田哲郎 (I H I)	土方邦夫 (東工大)
33(H 6)中山 恒 (東京工業大)	福迫尚一郎 (北海道大)	坂本雄二郎 (神戸製鋼)	土方邦夫 (東工大)
34(H 7)相原利雄 (東北大)	林勇二郎 (金沢大)	鳥越邦和 (ダイキン)	齋藤彬夫 (東工大)
35(H 8)越後亮三 (東京工業大)	荻野文丸 (京都大)	曾田正浩 (三菱重工)	齋藤彬夫 (東工大)
36(H 9)長島 昭 (慶応義塾大)	藤田恭伸 (九州大)	塩冶震太郎 (I H I)	飯田嘉宏 (横国大)
37(H10)黒崎晏夫 (東京工業大)	荒木信幸 (静岡大)	柘植綾夫 (三菱重工)	飯田嘉宏 (横国大)
38(H11)鈴木健二郎 (京都大)	吉田 駿 (九州大)	飯野利喜 (日立)	庄司正弘 (東京大)
39(H12)福迫尚一郎 (北海道大)	熊田雅弥 (岐阜大)	大隅正人 (三洋電機)	庄司正弘 (東京大)
40(H13)藤田恭伸 (九州大)	河村 洋 (東京理科大)	森田昭生 (三菱重工)	望月貞成 (東農工大)

第1期 会長  
1<sup>st</sup> President

小林 明 先生  
Akira KOBAYASHI

昭和36年11月～昭和38年5月



【会長当時の所属（略歴）】

豊田中央研究所取締役所長

昭和34年4月1日 名古屋大学工学部長  
～昭和36年3月31日  
昭和36年4月1日 定年退官  
昭和36年4月 豊田中央研究所取締役所長  
昭和36年5月22日 名古屋大学名誉教授

【ご逝去の年月日】 平成2年6月27日

【連絡先】

岐阜大学名誉教授 志水 昭史  
住所：各務原市鵜沼山崎町9の121  
TEL & FAX：0583-84-0807  
E-mail：shos@rio.odn.ne.jp

思い出話

小林明先生について何か想いでを書いてもらえないかとの依頼を受けましたので、先生が名古屋大学に在籍されました頃の古い記憶を辿ってみます。

小林先生の旅順工科大学時代から1945年までのご研究の中心は、エンジンの冷却特性をベッセル関数などを用い解析的に求めるものでした。これら一連の研究について「航空エンジンの性能向上に貢献できた」と、往事を懐かしんでおられました。敗戦後は研究の重点を、エンジンを含めた自動車工学に移され、点火栓や動弁機構の特性はじめ、パワートレインから車体の振動にわたる広範な分野の研究を精力的に進められました。

また、ご研究のほか工学部長など数多くの要職を歴任され、出張から夜行列車で帰ったその足で教室へ直行されることも珍しくなく、講義用の大部の資料もそんな列車の中で書いておられました。

このように教育研究に励まれ、貴学会の初代会長を勤められました小林明先生も他界されてすでに12年、伝統ある貴学会の今後一層の発展を祈念いたします。

岐阜大学名誉教授 志水昭史

第2期会長  
2<sup>nd</sup> President

抜山 四郎 先生  
Shiro NUKIYAMA

昭和38年6月～昭和39年5月



---

【会長当時の所属】

東北大学工学部機械工学科

【ご逝去の年月日】 1983年7月2日

【連絡先】

熊谷 哲

住所：〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉01  
東北大学大学院工学研究科 機械知能工学専攻

TEL & FAX：022-217-6932

E-mail：kumagai@verdure.mech.tohoku.ac.jp

思い出話

抜山四郎先生語録（抄） 千葉 徳男

1. コーヒーを飲むとき、砂糖を先に入れろ、掻き廻す手間が省ける。
2. 研究費は要らない。あれば研究しなければならないから。一生に一つ位はいい論文を書き、それだけを発表したい。
3. 下手な研究者は注文屋になる。実験を始めようとすれば、物の足りないことに記がつく。注文する。また足りない。注文・・・スタートなし。
4. 実験は毎日するものだ。たとえ、それが単に実験台のホコリを掃うことであっても。
5. 一度や二度の失敗を恐れずに、何度でも、挑戦しなければならない。最初に間違いのあるのに気がつかず、頑張りつづけるのを頑迷という。
6. もし、天国と地獄があるならば、死んだら地獄に行きたい。何の不自由のない天国では、退屈で仕方がないだろう。
7. 弘法大師は字が上手だから筆を選ばなかった。下手なうちは立派な道具を使い！

第3期 会長  
3<sup>rd</sup> President

矢木 栄 先生  
Sakae YAGI

昭和39年6月～昭和40年5月



---

【会長当時の所属】

東京大学工学部化学工学科教授

【ご逝去の年月日】 平成3年7月15日

【連絡先】

大島 榮次

東京都目黒区目黒 3-10-23

TEL: 03-3711-7010

FAX: 03-3711-6049

E-mail: [oshima@khk.or.jp](mailto:oshima@khk.or.jp)

矢木先生の思い出

矢木栄先生は、昭和3年に東京帝国大学工学部応用化学科を卒業され、一時信越窒素肥料に行かれましたが、やがて東京帝国大学に戻られて亀山研究室で赤外線に関する研究に従事されました。東京工業大学助教授の頃MITに留学され、放射伝熱の権威のHottel教授と共に燃焼の研究に従事されました。帰国後は東京帝国大学と東京工業大学の教授を兼務され、両大学に化学工学科を創設されることに尽力されました。先生は、炉の設計に関するパイプ的な教科書である「工業窯炉」などの著作があり、日本燃焼研究会の会長、あるいは政府のエネルギー専門部会や原子力特別委員会など、熱およびエネルギー関連の研究と行政の分野で活躍されましたが、後年の先生の守備範囲は化学工学全般に及び、特にそれまでの単位操作主体の化学工学には無かった反応工学、プロセス工学という分野の先駆的な提唱者でもあり、定年退官後は請われて千代田化工の副社長の重責を務められました。先生の守備範囲の広さは学究的な分野に限らず、野球、スキー、テニス、ゴルフなど何でもこなすスポーツマンでしたし、当時普通の車も高嶺の花であった頃にベンツで大学に来られるモダンな先生でした。（大島榮次）

第4期会長  
4<sup>th</sup> President

棚澤 泰 先生  
Yasushi TANASAWA

昭和40年6月～昭和41年5月



---

【会長当時の所属】

東北大学教授、工学部長

【ご逝去の年月日】 平成4年7月27日

【連絡先】

永井 伸樹

仙台市青葉区中山9-4-8

TEL & FAX : 022-278-2771, 022-278-2709

E-mail : nagai-n@cello.ocn.ne.jp

棚澤 泰 先生の思い出

棚澤 泰先生が昭和40年度の伝熱研究会会長にご就任のころ、会員数はまだ少ないながらも伝熱研究は飛躍の時期を迎えていました。数々の有数の研究業績を挙げられた学究肌の棚澤先生は、とくに工学と技術の関わり合いを重視するお考えを述べて研究会を指導されましたが、学会にその後の隆盛をもたらした当時若手の錚々たる諸先輩も、会長を心から敬愛しながら機会あるごとに酒を酌み交わし、和気藹々とした雰囲気の中で伝熱研究の将来を熱く語り合っていました。

一方、会長就任と期を同じくして東北大学工学部長に選出された棚澤先生は、当時膨張する大学の用地確保のために計画された青葉城後背地（青葉山）への総合的な施設移転を積極的に推進する立場から、先鞭をつけて7月から工学部の移転を実施し、今日の基盤を建設されました。また団塊世代の学生が大学教育や社会との関わりを問うようになったときも、先生は明確な姿勢を貫かれて学生に対処されました。

しかし一番記憶に残るのは、どんな激務にあっても、毎日必ず一度は薄汚れた白衣を羽織って研究室を回る先生の後姿でした。

（文責 永井伸樹）

第5期会長  
5<sup>th</sup> President

西脇 仁一 先生  
Niichi NISHIWAKI

昭和41年6月～昭和42年5月



---

【会長当時の所属】

東京大学工学部教授

【略歴】

昭和51年(1976)4月 株式会社西脇研究所設立

【ご逝去の年月日】 平成4年(1992)1月25日

【連絡先】

芝浦工業大学

システム工学部機械制御システム学科

平田 賢 宛

〒330-8570 埼玉県さいたま市深作 307

TEL : 048-687-5173 FAX : 048-687-5197

E-mail : [hirata@sic.shibaura-it.ac.jp](mailto:hirata@sic.shibaura-it.ac.jp)

西脇先生の思い出

昭和28年(1953)春、東京大学工学部機械工学科の卒業論文で、西脇先生の研究室に配属された。爾来40年間、親しくご指導を頂いた。当初、与えられたテーマは「液滴の燃焼」であったが、まず度肝を抜かれてのは「文献を読むな」と言われたことである。実験を重ねて、自分の目で何が起きているか現象をよく見て、自分の頭でよく考えよということである。実験をしてさえいけば、ご機嫌がよかった。

「問題はできるだけ単純化して考えよ」、「現象を8割支配するファーストタームを追え。セカンドタームなんかどうでもよい(いずれ誰かがやる)」、「他人のやったことはやるな」、「65点でいい、完璧を求めるな」等々、くりかえしくりかえし研究の基本を叩き込まれた。未だに不肖の弟子であり、忸怩たる思いである。

第27代会長 平田 賢(芝浦工業大学)

第6期 会長  
6<sup>th</sup> President

菅原 菅雄 先生  
Sugao SUGAWARA

昭和42年6月～昭和43年5月



---

【略歴】

大正10年3月 京都帝国大学  
工学部機械工学科卒業  
昭和6年5月 京都帝国大学・京都大学教授  
～34年10月 (工学部機械工学科)  
昭和34年10月 関西大学教授  
～42年3月 (工学部機械工学科)

【ご逝去の年月日】 昭和58年4月10日

菅原菅雄先生のこと

岐美 格 京都大学名誉教授

昭和22年の春、京大機械工学科の菅原菅雄先生のもとで卒業研究を始めることになってから、55年にもなる。菅原先生は、熱力学、蒸気表、蒸気タービン、ボイラ等に関する研究で多くの成果を挙げられ、既に伝熱についても研究しておられた。研究室には佐藤俊先生がおられた。昭和27年機械学会で、わが国初めて、「伝熱に関する最近の研究」と題して講演をされ、その後、同年機械学会誌に発表された。このご講演の資料を作るようにご下命を受けて、CIE図書館等で学術誌を調査したことを思い出す。昭和34年に停年ご退官後、関西大学に勤められ、42年に伝熱研究会の会長として斯界の発展につくされた。はやくから、研究論文を欧文(英文)で発表するようにと、指導していただいた。関西大学をご退職後も、先生のお宅にお邪魔すると、静かにドイツ語の本を読んでおられた。先生は戦前、スイス、ドイツに留学されたが、そのときのお話しをよくうかがったものである。昭和58年4月10日、ご逝去になった。

第7期 会長  
7<sup>th</sup> President

山縣 清 先生  
Kiyoshi YAMAGATA

昭和43年6月～昭和44年5月



---

【会長当時の所属】

宇部工業高等専門学校

思い出話

西川兼康 九州大学名誉教授

【ご逝去の年月日】 昭和48年2月24日

【連絡先】

〒665-0841 宝塚市御殿山3丁目1-34  
山縣 浩一  
TEL & FAX 0797-85-6058

私が山県先生にお会いしたのは昭和16年九州帝国大学に入学したときであり、Nusseltの著書「Technische Thermodynamik」をテキストとして工業熱力学を講義されていた。大学は「自ら学ぶ」ところであると言われ、学生に講義させ、肝要な所は先生自ら説明された。

大学卒業時になって先生の講座に残るように言われたが、当時は第二次世界大戦中であり、卒業後直ちに技術将校として軍に配属され、戦後先生の講座に復帰した。そこで研究をやる心構えとして言われたことは、「俺の真似をするな」であり、既に手掛けられたテーマの単なる拡張を弟子に研究させることはされなかった。

先生は、研究テーマを選定するときに何をやるかを当時の学問のレベルで考えて十分に議論された。そしてテーマを決めたならば、どういう風にやるかということは指導されないで、本人の自主性に任せられた。

先生はまた工学の研究は現場とつながっているべきであるという信念で、多くの現場の問題に取り組まれた。若手連中にそれを実施させ、現場の要求に応えると共に、大学と産業界の接触をはかられ、大学の研究の質を高められた。

一方、先生は熱力学にも非常に関心をもっておられ、蒸気の断熱指数に関する谷下教授との論争は、いかに先生が熱力学に対し厳密な論理を追求され、安易な応用を謹むべきだということを教えられたように思われる。

先生は学問の厳しさと人間的暖かみを備えた独自の風格をもっておられ、「仲良く厳しく」と言われ、学問の厳しさと人間的暖かみを教え込まれた。

第8期会長  
8<sup>th</sup> President

坪内 為雄 先生  
Tameo TSUBOUCHI

昭和44年6月～昭和45年5月



【会長当時の所属（略歴）】

昭和11年 東北帝国大学 助教授  
昭和20年 東北帝国大学 教授  
昭和37年 東北大学高速力学研究  
昭和40年 東北大学高速力学研究所長  
昭和44年 定年退職  
昭和44年 東北大学名誉教授  
昭和44年 東北学院大学教授  
昭和59年 退職

【その他の経歴】

昭和43年 日本機械学会商議員  
昭和43年 日本機械学会東北支部長  
昭和44年 第47期日本機械学会副会長  
昭和44年 第8期日本伝熱研究会会長  
昭和46年 日本機械学会商議員  
昭和46年 日本機械学会名誉員

【賞罰】

昭和35年 機械学会賞受賞  
昭和45年 宮城県教育功労者表彰  
昭和51年 勲二等瑞宝賞受賞

【ご逝去の年月日】 平成11年12月4日

【連絡先】

増田 英俊

住所：〒980-0871 仙台市青葉区八幡5-6-2

TEL & FAX：022-234-5513

坪内為雄先生の思い出

坪内為雄先生が他界されて早2年余りになる。私は先生のご退官（昭和44年3月）前の9年半ご指導を受けたのでその思い出も多い。特に印象に残っているのは私の高速力学研究所への入所当時のことである。例えば、先生は極細線及び微粒子の熱伝達で有名な論文を書かれたが、その試片作りである。細い線では直径約5μmのものであったが、これはWohrstone線から銀被覆を溶液ではがして白金の裸線にしなければならない。微粒子では直径1mm前後のサーミスタが対象だったが、温度分布検討のため表面のガラス被覆層に直径25μmの熱電対をさせなければならない。このミクロな技術を自ら手をとって実践して示された時は感嘆するばかりだった。また先生は伝熱研究のパイオニアとしての役を果たされたが、常に先を読んだ的確なアドバイスをされた。例えば、当時の物体面の熱伝達率の研究では、そのoverallを精度く測定するというのが主流であったが、先生はlocalにも十分注意しなさいとよく言われ、われわれはその測定に苦心した。とはいえ坪内先生は研究にはあまり口出しされず、いつまでに結果を出しなさいとも言われなかった。いわば古き良き時代の大学教授としての最後のお方のように思われる。先生が退官された直後から東北大学はもちろん、全国各地で壮絶な大学紛争が繰り広げられていった。

東北大学名誉教授

増田 英俊

第9期 会長  
9<sup>th</sup> President

橘 藤雄 先生  
Fujio TACHIBANA

昭和45年6月～昭和46年5月



【会長当時の所属】

東京大学教授，  
工学部原子力工学科，生産技術研究所

【略歴】

昭和11年 東京帝国大学工学部機械工学科卒業  
同年 東京帝国大学附属航空研究所  
昭和20年 東京帝国大学助教授 第二工学部  
昭和24年 東京大学助教授 生産技術研究所  
昭和29年 東京大学教授 生産技術研究所  
昭和33年 日本原子力研究所主任研究員（兼）  
昭和38年 東京大学教授 工学部  
Co-chairman, Honorary Editorial Advisory Board  
International Journal of Heat and Mass Transfer

【ご逝去の年月日】 昭和47年6月10日

橘先生の思い出

私が橘藤雄先生の研究室にお世話になろうと思ったのは、伝熱の講義のときに、沸騰の研究の話がされ、「論文は背の高さくらいあるのだけれど、まだなにもわかっていない」と話されたのをうかがったのがきっかけであった。その時学生だった私には、その意味が分からず、それなら研究をしてみたいと思って沸騰の研究を志望した。橘先生のお言葉は、いつも簡明で心に残るものが多かった。論文等の文章は、いつもていねいに添削して下さった。実験装置を単純化した図に「実験装置概念図」と云う表題をつけていると、「きみ、これ

を見て詳細図だと思う人は誰もいないよ」とおっしゃって、「概念図」と云う文字を消された。

先生は、お立場上学外のお仕事も多くしておられたようであるが、学生達にはそのことはほとんどお話にならなかった。その中で、伝熱研究会のことだけは、「日本中の伝熱の研究者が集まって、学会をやっている。きみも伝熱の研究をやっているのだから、それくらいは知っておきなさい。」とおっしゃった記憶がある。いまにして思えば、それが京都で開催された第1回の伝熱シンポジウムの年であった。伝熱研究会の初代の副会長を務められたようであるから、設立当初の事務処理をお引き受けになっていたに違いないと思われる。橘先生に最後にお目にかかったのも広島で開催された第9回伝熱シンポジウムであった。その後、すぐに60歳の誕生日を目前にして急逝されてしまった。当時、橘先生は、東京大学の原子力工学科の教授と生産技術研究所の教授を兼ねておられ、前者のあとを継がれたのが秋山守先生で、後者のあとを継がれたのが棚澤一郎先生である。伝熱研究会は、その後、伝熱学会となり、法人格も得て、40周年を迎えた。橘先生は、ある程度以上の規模の拡大についてはどう思っておられるかはわからないが、学会の基盤が確立し、研究がより広い分野に広がる一方、研究をたのしみ大切にする気風は間違いなく受け継がれていることは、きっとよるこんでいただいていると思っている。

（河村 洋，東京理科大学）

第10期会長  
10<sup>th</sup> President

齋藤 武 先生  
Takeshi SAITOH

昭和46年6月～昭和47年5月



---

【会長当時の所属】

北海道大学教授

齋藤先生の思い出

【略歴】

豊橋技術科学大学 副学長  
豊橋技術科学大学 名誉教授  
㈱北海道熱供給公社 相談役、取締役  
北海道ガス㈱ 技術開発研究所 技術顧問

1950年4月が齋藤先生との初めての出会いであり、北海道大学における機械工学科の旧制最後の学生入学式であった。先生は新進気鋭の助教授として私共の目前に現れ、熱力学および熱機関の講座を担当しておられたが、これが私の生涯の学問分野となったのは不思議なご縁といえよう。

【ご逝去の年月日】 平成13年3月6日

1963年1月に企業から助教授として大学に戻り、先生のご指導で学生教育のイロハから論文博士の学位取得へのノウハウなど、常に暖かい眼差しで指導して下さった先生の面影は忘れる事ができない。

【連絡先】

北海道大学大学院工学研究科機械科学専攻  
工藤 一彦  
〒060-8628 札幌市北区北13条西八丁目  
TEL, FAX: 011-706-6376  
E-mail: [kudok@eng.hokudai.ac.jp](mailto:kudok@eng.hokudai.ac.jp)

1970年頃大学紛争では、工学部の責任者として教室に寝泊りされ、学生の対応への過労からか、肝臓障害での治療を余儀なくされたことを覚えている。また私の家内は子供時代から先生を存知あげており、私の教授昇格・文部省在研などを含めて、家族ぐるみ公私にわたるお世話を頂いたが、豊橋技術科学大学の副学長時代にも大変お世話になったことなど、思い出は尽きないのです。

谷口 博（北海道大学名誉教授）

第 1 1 期 会長  
*11<sup>th</sup> President*

小笠原 光信 先生  
*Mitsunobu OGASAWARA*

昭和 47 年 6 月 ~ 昭和 48 年 5 月



---

【会長当時の所属】

大阪大学工学部教授

日本伝熱研究創設の頃

【略歴】

大阪大学 名誉教授

日本伝熱学会は、本年度が創設 40 周年に当たる、とのお報らせをいただき、まことに嬉しく、ご同慶の至りに存じます。

これを機会にこの老骨は、創設の頃を懐かしく回想しています。

【連絡先】

〒299-0242 千葉県袖ヶ浦市久保田 2-6-3  
TEL , FAX : 0438-63-6815

昭和 30 年代といえば、まだ敗戦後の荒廃が随所に見られる時代でした。私は、戦災を受けた実験室の復旧に取り組みながら、細々と熱伝導の解析に打込んでいました。

35 年頃のことでしたか、東京の先生がたから、伝熱の研究会を作ろうではないか、とのお誘いをいただいたので、たしか京大の佐藤先生と共に上京しました。そこには、機械学会の伝熱の分野で存じ上げている比較のお若い先生方が各地からお集まりでした。このような打合せ会が何回開かれたか、覚えていませんが、これによって「日本伝熱研究会」を作ろう、そして初代会長には小林 明先生にお願いしようということになり、先輩の先生を先頭にして、数人で、ゾロゾロと小林先生のところへお願いに伺ったことを懐かしく思い出しています。

第 1 2 期 会 長  
12<sup>th</sup> President

内 田 秀 雄 先 生  
Hideo UCHIDA

昭和 48 年 6 月 ~ 昭和 49 年 5 月



---

【会長当時の所属】

東京大学工学部機械工学科教授

【略歴】

- 1979 年 5 月 東京大学名誉教授
- 1978 年 10 月 原子力安全委員会委員
- 1987 年 10 月 原子力安全委員会委員長
- 1993 年 2 月 退職
- 1997 年 1 月 (財)原子力安全研究協会理事長

【連絡先】

〒161-0031 東京都新宿区西落合 3-10-8  
TEL : 03-3952-0161

メッセージ

1 2 代会長に就任して最初の仕事は、来年の 1974-9-2 から 9-7 まで第 5 回国際伝熱会議を日本で開催しよう。企画委員会の委員は西脇委員長以下約 20 名。「その費用の募金係は内田が担当せよ」という事が決まったことである。その 73 年の夏がいわゆる第一次オイルショックといわれる。募金は例えば 20 人の委員が一人 100 万づつ集めれば 2000 万円だから何とか集められるだろう。と安易に思ったがそうは行かなかった。誰も金集めに奔走する人はいなかった。オイルショックで大会社とて醸金の余裕などには事欠く年であった。国際会議を開くということになれば、73 年から運転資金が要る。詳細は省略するとして、結局募金の実体は私が負う事になった。といっても過言ではなかった。臆気ながら独り募金計画をたて、訪問を始めた。有り難いことに、74 年会議開催までには期待を超えた資金が集められた。会議終了後に清算すると、かなりの資金が残った。次の会長の甲藤好郎氏と相談し、「伝熱研究会の将来を見通して有効に使えるように、それまで二人で預金に封じることにしておこう」とした。その後研究会が日本伝熱学会として法人化される見透しがついた年に、当時の会長に、「学会の資金に使って下さい。」と金額をお渡しした。

第13期会長  
13<sup>th</sup> President

水科 篤郎 先生  
Tokuro MIZUSHINA

昭和49年6月～昭和50年5月



【会長当時の所属】

京都大学工学部

【略歴】

昭和17年9月 京都帝国大学  
工学部化学機械学科卒業  
昭和31年1月 京都大学教授(工学部)  
～58年4月

【ご逝去の年月日】 昭和63年2月24日

編集者より水科篤郎先生の思い出などを書いて頂きたいとのご依頼でありましたが、水科先生がお書きになった何かの講演か原稿かのプロットの下書きが丁度手許にありましたので、それを直接ここに紹介させて頂いて責を果たさせていただきます。

1. 研究者には自由を。
2. 実用的な研究か、自然の原理を解明するような基礎的研究を(Colburn先生)。
3. すべてに疑問を持て。本に書いてあることは嘘と思え。
4. 新しいinstrumentは使いこなせ。instrumentがあつて研究が進展する。なるべくなら、disturbしない光学器械がいい。ただし、温度場があるとパスが曲がるのが難点。visibleがよい。触るより見るが良い。
5. 押してだめなら引いてみな。発想の転換。flexibleでなければならぬ。一方頑固さも必要。研究管理者はこの点をleadするのが役目であろう。研究管理とはやっている研究にstopをかけることである(Chilton先生)。
6. 理論より実験を。自然に教えを請え。やってみなはれ(鳥井さん)。
7. 最後に、化学工学で伝熱をやる人がもっと出てきて欲しい。

荻野文丸

第 1 4 期 会長  
14<sup>th</sup> President

杉山 幸男 先生  
Sachio SUGIYAMA

昭和 50 年 6 月 ~ 昭和 51 年 5 月



---

【会長当時の所属】

名古屋大学工学部化学工学科教授

【略歴】

名古屋大学名誉教授  
愛知工業大学客員教授

【連絡先】

〒470-0132 日進市梅森町新田 135-230  
TEL , FAX : 052-803-3358

メッセージ

伝熱 40 周年お目出度うございます。

伝熱に関する問題は機械、化学工学、応用化学、航空工学、電気、金属、原子力など各分野にまたがっています。これらの分野が、有機的に結ばれて大きく発展することを期待しています。

超伝導、温暖化を含めた環境関係、エネルギー源、断熱材料の開発などの総合的研究が望まれます。会員各位の御健闘をお祈りいたします。

第15期会長  
15<sup>th</sup> President

西川 兼康 先生  
Kanayasu NISHIKAWA

昭和51年6月～昭和52年5月



---

【会長当時の所属】

九州大学

【現在の所属】 九州大学名誉教授

【連絡先】

〒810-0014 福岡市中央区平尾3-30-15

TEL & FAX 092-531-3509

E-mail: [nishikawa@gibbs.mech.kyushu-u.ac.jp](mailto:nishikawa@gibbs.mech.kyushu-u.ac.jp)

メッセージ

日本伝熱学会が創立40周年を迎えることは非常に感慨深い。日本伝熱研究会主催の第1回伝熱シンポジウム（内容充実の目的で発表件数を1研究室1件に制限）が1964年に京都で開催され、機械工学、化学工学、原子力の専門家が初めて一堂に会し、研究発表と討論を行った。当時は、抜山四郎先生、菅原菅雄先生、山県清先生、谷下市松先生、川下研介先生、西脇仁一先生、粟野誠一先生、橋藤雄先生など熱の大家が前方に陣取って厳しい質問をされるのが常で、若手は非常に緊張し自力を精いっぱい振り絞って発表する雰囲気があった。今に考えると、このような大家の先生方から直に批判を受けることが若手を触発し、わが国の伝熱研究発展の足掛かりとなった。伝熱研究会発足当時盛んであった伝熱現象の基礎研究は、わが国の機械技術を先進国レベルに上げる端緒の一つとなった。今後、省エネルギーや新エネルギー開発に関連する課題はもちろん、新技術開発として地球環境に関連した伝熱、新素材生産に関連した伝熱、バイオ伝熱、マイクロ伝熱などをあげることができ、伝熱研究の分野はますます拡大するものと思われる。技術開発においては「技術の心を大切にし、人間の心をもって機械を使う」ことを忘れてはならない。

第16期会長  
16<sup>th</sup> President

佐藤 俊 先生  
Takashi SATOH

昭和52年6月～昭和53年5月



---

【会長当時の所属】

京都大学工学部

【略歴】

昭和18年9月 京都帝国大学  
工学部機械工学科卒業  
昭和34年1月 京都大学教授  
～58年4月 (工学研究所, 工学部)  
昭和58年4月 摂南大学教授(工学部)  
～62年6月

【ご逝去の年月日】 昭和62年6月18日

佐藤 俊先生は、昭和58年に停年退官されるまでの37年間、京都大学における教育、研究に携わられた。先生は、伝熱研究会創立に関わられた重要メンバーの一人であり、同時に Int. J. Heat and Mass Transfer の7人の Founding Editors の一人でもあった。同誌が現在も踏襲している Regional Jurisdiction の採用を通じて、日本の伝熱学界の国際的地位の確立に貢献された。先生は単相流の対流熱伝達、沸騰熱伝達、限界熱流束、ふく射熱伝達、不安定燃焼など多彩な研究を展開されたが、中でも戦後すぐに世界に先駆けて行われた、非一様壁面温度下の層流平板熱伝達、熱伝達への主流部乱れの影響、熱伝達率の非定常測定法と乱流計測デバイスの開発など、が特筆される。先生は、手取り足取りの指導はされなかったし、温顔とスマートな振る舞いに学生は甘えていたが、各自自分に責任をもつのが前提であったから、実は厳しい師でもあったと思う。

鈴木健二郎

第 17 期 会長  
17<sup>th</sup> President

森 康夫 先生  
Yasuo MORI

昭和 53 年 6 月 ~ 昭和 54 年 5 月



【会長当時の所属】

東京工業大学工学部機械物理工学科

【略歴】

昭和 34 年 Research Staff,  
Cornell University, U.S.A.  
昭和 57 年 東京大学生産技術研究所兼任教授  
昭和 58 年 東京工業大学、東京大学退職  
昭和 59 年 Springer Distinguish Professor,  
University of California Berkeley  
昭和 61 年 米国工学アカデミー外国人会員  
平成 2 年 President, Inter. Center for Heat  
Mass Transfer

【論文】

昭和 38、48、57、59：日本機械学会論文賞  
昭和 57 年：米国機械学会論文賞  
昭和 63 年：米国機械学会  
Max Jakob Memorial Award  
昭和 63 年：国際熱流体学会,  
A. V.Luikov Metal Award

【連絡先】

東京都世田谷区成城 5 - 9 - 8  
TEL&FAX： 03 - 3483 - 1303

メッセージ

本学会の会員は、約 25 年前は伝熱に関する学理及びその応用理論・技術の研究・開発と応用等を中心とし、多くの場合連続体の伝熱論が議論された。しかし熱伝導式及び熱伝導微分方程式の代表的物性である熱伝導率は殆どの場合実験値が用いられ、気体は多くの構成分子の熱運動の平均値が用いられ、得られた結果は多数分子の熱物性平均値が用いられている。現在用いられて伝熱の基礎方程式は、ある程度の信頼性があり、研究、開発が必要な多くの場合に適当な平均値の結果を求めることができる。しかしこれからは超微細な部分の時間的に変動する伝熱、微小な生物の熱現象、大きな装置では原子炉の安全性を向上させるための特殊な構造物における伝熱、或いは高温のロケットの燃焼などにおける空間的に複雑な構造の各部の正確な温度計算・計測、更に時間的にも変動する電流が複雑に非定常に流れる物体の非定常伝熱の研究等が要求されるであろう。

第18期 会長  
18<sup>th</sup> President

甲藤 好郎 先生  
Yoshiro KATTO

昭和54年6月～昭和55年5月



---

【会長当時の所属】

東京大学工学部教授

【略歴】

東京大学工学部名誉教授

【連絡先】

〒153- 東京都中野区野方 3-6-35  
TEL・FAX : 03-3385-0842

このたび、伝熱学会40周年にあたり、元会長としての寄稿の依頼をいただき有難うございました。ただ、現在主人は闘病中でありますため、みなさまにご満足いただける記事をお届けいたすことはできません。主人に話しますと、よくわかりまして、自分では「書くよ」と申し、二人でこれまでの書き物を読んだり、書いてみたり、話し合いながらとても楽しい時間を持つことができました。まだまだメッセージの形とはなりません、このような楽しみもあったんだと、かえって楽しみを与えていただいたことに感謝の念でいっぱいでございます。このような次第でございますので代筆にて失礼致すこととなりますが、伝熱学会の40周年を祝し、益々のご発展を心よりお祝い申し上げます。

かしこ

甲藤好郎内

第19期 会長  
19<sup>th</sup> President

国井 大蔵 先生  
Taizoh KUNII

昭和55年6月～昭和56年5月



---

【会長当時の所属】

東京大学工学部 化学工学科

【略歴】

技術コンサルタント

【連絡先】

〒153-0065 東京都目黒区中町 1-25-16  
TEL : 03-3712-4992 FAX : 03-3793-4334

メッセージ

50年ほど前に放射伝熱の研究をやっていた関係で、化学工学専攻として日本伝熱研究会の設立に関与することが出来ました。工学として伝熱理論を応用する立場から、容易に設計計算に適用できるような理論式を心がけておりましたので、バックグラウンドが物理系の多い伝熱工学の方々にも同志に入れていただいたものと思われま

す。現役晩年の頃は、自ら考案した高温回気系反応プロセスの研究開発（國のプロジェクト）に熱中しておりましたが、どの段階でも熱エネルギーの伝達速度を予測することが核心の課題でした。

喜寿も過ぎました現在は、殆んど趣味のようにしてリサイクル関連の新技术研究開発に関わっておりますが、目的現象を端的に表現する伝熱理論の導出と設計への応用がスタートになっておりま

す。伝熱の旗揚げからすでに40年、日本伝熱学会が伝熱研究の熱エネルギー関連技術に多くの貢献を果たして来られた事を嬉しく存じます。更には、理論と技術間の交流を密にし、新理論から革新技术が、技術の現場から新理論が輩出して、日本の伝熱研究が益々発展する事を期待してやみません。

第20期 会長  
20<sup>th</sup> President

小林 清志 先生  
Kiyoshi KOBAYASHI

昭和56年6月～昭和57年5月



---

【会長当時の所属】

静岡大学工学部

【略歴】

昭和19年9月 東北帝国大学  
工学部航空学科卒業  
昭和35年10月 東北大学教授、工学部  
昭和55年8月 静岡大学教授、工学部長  
平成2年9月 豊田工業大学学長

【連絡先】

愛知県愛知郡東郷町白鳥 3-27-4  
TEL & FAX : 0561-38-6318  
E-mail : kkobayas@d3.dion.ne.jp

メッセージ

日本伝熱学会が設立40周年を迎えることになった由、本当に時の流れは早いものだと思うと共に、心からお慶び申し上げたい。

およそエネルギー消費のあるところに、伝熱現象は必ず随伴し、その基礎的分析、解明に力を注ぐのが、「伝熱学」であり、その成果を基盤にして人類の生活に役立てようとするのが、「伝熱技術」であろう。この40年間を振り返ってみると、それら両者の発展、進歩には実に目覚ましいものがある、と実感せざるを得ない。豊かな生活への応用と同時に、限られたエネルギーの有効利用技術、地球温暖化対策技術、等々21世紀の人類にとって深刻になりつつある問題の主要部分も「伝熱学」「伝熱技術」の如何に大いに掛かっていると云っても過言では無いであろう。日本伝熱学会会員の皆様の今日までのご健闘に敬意を表すると共に、今後の益々のご活躍を期待申し上げたい。

第 2 1 期 会長  
21<sup>st</sup> President

青木 成文 先生  
Shigebumi AOKI

昭和 57 年 6 月 ~ 昭和 58 年 5 月



---

【会長当時の所属】

東京工業大学原子炉工学研究所教授

青木先生の思い出

【ご逝去の年月日】 平成 8 年 5 月 1 0 日

【連絡先】

〒140-0013 東京都品川区南大井 6-4-6  
ニューハイツ大森 222  
青木 美代子

大学院修士課程で初めてお会いし原子炉熱工学の授業を受けました。昭和 40 年前半は原子力がエネルギー分野で伸びていた頃です。先生は最先端のお話がお好きなようでした。研究分野でも先見の明があり、先端技術の基礎的研究に力をいれておられていたようです。原子炉からの除熱で相変化を伴う、沸騰、凝縮には一段と力をいれておられました。授業の中でも、このような話を、著書「原子炉熱工学」とともに楽しく話されていたのが思い出されます。大学外の仕事が多く、直接接する機会は少なかったのですが、それだけにお会いすると印象的でした。

ファッションでも粋なところがございました。特に各種の帽子を持っておられ、少し斜めにかぶって先端のセンスを出されておられました。外国出張も多かったものですから、そういったところから見につかれたのかなと推測します。

いろいろ思い出されますが一部を御紹介しました。

東京工業大学教授 有富 正憲

第 2 2 期 会 長  
22<sup>nd</sup> President

植 田 辰 洋 先 生  
Tatsuhiko UEDA

昭和 58 年 6 月 ~ 昭和 59 年 5 月



【会長当時の所属】

東京大学

【略歴】

1960 年 12 月 東京大学教授  
1984 年 4 月 東京大学定年退職（名誉教授）  
工学院大学教授  
1991 年 3 月 工学院大学退職

【連絡先】

東京都世田谷区奥沢 3-44-10  
TEL : 03-3727-0132

メッセージ

伝熱研究会はわが国の伝熱研究推進の統合連絡機関として発足した。1961 年当時の研究は伝熱過程をそれぞれの熱輸送のメカニズムや基礎過程を考えて取り扱うように急発展していた。対流伝熱、相変化を伴う伝熱や熱放射などの取り扱い方が、いわゆる Engineering Science 的になってきた。このような趨勢にわが国も早く伍し、その進展に大きい貢献をしよう、というのが伝熱研究会の目的であった。小さいけれど活力にあふれた研究会で、その後の伝熱シンポジウムの盛り上がりは、いまでもしばしば語り草になっている。蒸気原動機の講義をしていた私など大いに啓発された。

大学紛争のとき、事務担当をしていた私の研究室のある東大の建物も封鎖された。やむなく資料を手押し車で持ち出し、工学部暖房室のボイラ横で、伝熱研究誌の発送や幹事会の事務連絡したのは今は昔 1969 年 1 月であった。会長を務めさせて頂いたのは第 22 期(1983 年度)でした。それまでの約 20 年間の伝熱研究は大学中心であった。産業界からの研究発表や問題提起の必要性が強調された。次年度の第 21 回伝熱シンポジウムでは、環境伝熱、熱交換器、集熱・蓄熱のセッションが設けられた。

それからでもはや 20 年。計測技術や数値シミュレーション技術の進歩、伝熱現象の解明を要する技術分野の拡大は目覚ましい。それに対応して活動を進めてきた伝熱学会に敬意を表し、今後の時代に即した発展を期待しています。

第 2 3 期 会 長  
23<sup>rd</sup> President

武山 斌郎 先生  
Toshiro TAKEYAMA

昭和 59 年 6 月 ~ 昭和 60 年 5 月



---

【会長当時の所属】

東北大学工学部機械工学科

【連絡先】

石巻市蛇田字西境谷地 4-12

TEL : 0225-23-0228

メッセージ

豊鑠（かくしゃく）として水煙る 武山斌郎

伝熱研究の沸騰と凝縮を、鍋釜の煮沸騰と、湯気・曇・靄・霞・雲・雨・露・霧の滴状凝縮、霜・氷・雪・霰・雹・霰の氷状凝縮を知っている女房に、もっと素晴らしい現象が自然の中にあるよと、俳句の冬の季題“水煙る”の一文を弄する。

満潮時に逆流する北上川河口は、流れが静止する湖として、我が家の目の窓越しに広大な景観をつくる。水は太陽光で暖められ、冬の澄んだ大気の中へ気化・蒸発（沸騰）し、1mの高さの空間を上昇するが、静かな低温熱伝達のため霧（凝縮）となることを強いられ、水滴群の水煙が白く輝やく。しかし、乾いた空気中では、再び気化・蒸発（沸騰）せざるを得ない3mの短い命で、淡く消えてゆく。三度繰り返しの相変化である。

“内なる炎を燃やせ”の冬期五輪も終わった。オリンピックは“内”でいいかも知れないが、研究は“外なる愛を燃やせ”の協力となろう。老いて燃える人を豊鑠と呼ぶ。あやかりたい。

(2002MAR)

第 2 4 期 会長  
24<sup>th</sup> President

岐美 格 先生  
Itaru MICHIYOSHI

昭和 60 年 6 月 ~ 昭和 61 年 5 月



---

【会長当時の所属】

京都大学工学部原子核工学科

【略歴】

昭和 23 年 3 月 京都大学工学部機械工学科卒  
昭和 36 年 4 月 京都大学教授  
~ 平成元年 3 月 (工学部原子核工学科)  
平成元年 4 月 松江工業高等専門学校校長  
~ 平成 7 年 3 月

【連絡先】

〒603-8167 京都市北区小山西大野町 27  
Tel. 075-492-5698

伝熱学の発展を祈る

昭和 60 年に伝熱研究会の会長を仰せつかったが、ちょうど東京で伝熱シンポジウムがあったときであった。幹事会は、東大駒場の生産技術研究所で開かれたが、会長として毎回出席した。その頃、伝熱研究会の名称を変更して伝熱学会としてはどうかとの意見が出ていたので、最終の幹事会で、そのことについて、検討委員会の設置を含め、次期幹事会に検討を引き継ぐことにした。その後の経緯はご承知の通りである。昭和 36 年 11 月に発足した伝熱研究会の会則第 2 条に、「本会は、伝熱に関する学理技術の振興を促進すると共に、会員相互および国際的な連絡を計ることを目的とする。」とある。一方、社団法人伝熱学会の目的は、「この法人は、伝熱に関する学理及び応用についての発表、知識の普及、会員相互及び国際的な交流を図ることにより、伝熱学の進歩普及を図り、もってわが国における学術の発展に寄与することを目的とする。」としている。40 年の時の流れを感じる。伝熱学の発展を祈って止まない。

第25期 会長  
25<sup>th</sup> President

長谷川 修 先生  
Shu HASEGAWA



昭和61年6月～昭和62年5月

---

【会長当時の所属】

九州大学

【ご逝去の年月日】 2001年7月13日

【連絡先】

〒810-0022 福岡市中央区薬院 4-10-33-103

長谷川 馨子

TEL & FAX : 092-522-4674

故、長谷川先生は、会長を勤められた86年当時、会員数がすでに千人を越え、伝熱シンポジウムも盛会であることを慶びながら、一方では、第一回が43件中29件に絞られて行われたことを引合いに、発表件数が多いと会場が分散し興味ある発表を同時に聞き議論することができないと書かれている。異分野の発表に接する環境になければ細分化した専門家を育てる危険がある。多様な基礎研究の上に立つ、社会のニーズに応える応用研究が重要である、とも指摘されている（伝熱研究98、100号）。今でこそ、基礎重視とともに研究の社会還元が叫ばれ、ニーズやシーズ探しも危機感をもってなされているが、学問と社会の関係のあり方に関する普遍的課題のように思う。一研究者がすべてをカバーすることは元よりできないが、どのように、どれ程社会に貢献できるのか、姿勢や心構えを説明できる、いわば研究者の成熟した説明責任を問われているような気がします。

（九州大学・福田研二）

第26期 会長  
26<sup>th</sup> President

大谷 茂盛 先生  
Shigemori OTANI

昭和62年6月～昭和63年5月



---

【会長当時の所属】

東北大学

【略歴】

1987年 東北大学工学部長、  
化学工学協会(現化学工学会)会長、  
日本熱物性研究会(現日本熱物性学会)  
会長

【ご逝去の年月日】 1990年10月15日

【連絡先】

三浦 隆利

仙台市青葉区荒巻字青葉07

東北大学工学研究科化学工学専攻

TEL & FAX : 022-217-7250

E-mail : miura@tranpo.che.tohoku.ac.jp

思い出話

大谷先生から「総長告辞で話す内容を書いて持ってきてくれないか」という言葉を戴き、待ってましたとばかりに貯めておいた文章を書いて持ち込んだ。先生曰く、「ご苦労様、良くできているが、俺の体験を話そう」。その結果、先生からそれまで座右の銘として戴いていた「経寸乃石十枚、国宝に非ず、一隅を照す、是即ち国宝也」東北の国土祭酒作という色紙のことを中心に告辞を活字にすることになった。最澄著「山家学生式」の一文であり、本来はお題目ばかりをどんなに唱え続けて見たって、それだけでは人間の宝にはならない、大事なは一遇を照らし、まず自分の足元を照らし、自分の今やれることを自分の足元からまずやっっていこうという意味です。先生はそれを財宝を持っていても宝ではない、博士や修士号を取得したことは不明な科学や技術の一部を照らした、それが国宝に匹敵する、これからも研究に励みなさいと言う風に話された。

東北大学 三浦隆利

第 27 期 会長  
27<sup>th</sup> President

平田 賢 先生  
Masaru HIRATA



昭和 63 年 6 月 ~ 平成元年 5 月

---

【会長当時の所属】

東京大学先端科学技術研究センター教授

【現在の所属】

平成 4 年 3 月 東京大学停年退官

同年 4 月 芝浦工業大学システム工学部教授  
現在に至る

【連絡先】

〒330-8570 埼玉県さいたま市深作 307  
芝浦工業大学システム工学部  
機械制御システム学科

Tel : 048-687-5173 Fax : 048-687-5197

E-mail : [hirata@sic.shibaura-it.ac.jp](mailto:hirata@sic.shibaura-it.ac.jp)

メッセージ

別項にも記したように、1953 年の入門以来、西脇先生には実験重視の姿勢を徹底的に叩きこまれた。最近も平行二平板間に挟まれ空間で、下面中央に置かれた加熱面から立ち上がったプルームが、上面に衝突するときの熱伝達を取り扱った。実験するまではつい漠然と、強制対流衝突噴流と類似のイメージを描いていたのだが、実験の結果を見て愕然とした。プルームはほとんど揺動も拡散もせず、ほぼ一定の速度を保ったまま素直にまっすぐ立ち上がり、衝突時の熱伝達率は二平板間の距離を変えてもほとんど無関係に、概ね一定だったのである。頭だけで考えてシミュレーションしていたら全く別の結果が出していただろう。もう一つの例。シルト質の土と水の混合物を容器に入れ、恒温室で表面から一次元的に冷却し、内部にアイスレンズを含む永久凍土構造を実験室的に作り出した。そこまではよかったのだが、凍土の中に板を埋設・固定し、土から与えられる応力を測ったところ、予想もしなかった方向の力が働いているのではないか。あれこれ実験を繰り返しているが未だに原因がつかめていない。

「現象をよく見ること」、まさにこれに尽きる。

第 28 期 会長  
28<sup>th</sup> President

藤井 哲 先生  
Tetsu FUJII

平成元年 6 月 ~ 平成 2 年 5 月



---

【会長当時の所属】

九州大学

【連絡先】

福岡県大野城市白木原 2-12-16

TEL : 092-591-7384

E-mail : t-fujii@mxn.mesh.ne.jp

メッセージ

恩師山縣清先生からいただいた忠告に従えなかったことが二つある。その一つは、「研究所にいると視野が狭くなるので、講義をなささい。講義をすると、これまでの理解が浅かったことが分かる。」もう一つは、「教授になったら 5 年に一度しか論文を書くな。(ちまちました論文を書くものではない)」ということであった。第 2 の職場も退き、ふりかえると、恩師の忠告に従っておけばよかったと後悔する。しかしもう遅い。それに代わるものは、体系的な記述を試みることではないかと思う。昨年末、「復水器 - 理論と実際」という本を電気化学が専門の川辺充志博士と共編著として出版した。機械工学系の教室に一冊ぐらいあってもよい本だと思っている。今後は自由対流と凝縮について書きたい。

最近の学問は、部外者的発言かもしれないが、政治と同様にやみくもに走り続けているようだ。いずれ息切れし、落ち着いた状態に回帰するのはなかるうか。

第 29 期 会長  
29<sup>th</sup> President

石黒 亮二 先生  
Ryoji ISHIGURO

平成 2 年 6 月 ~ 平成 3 年 5 月



---

【会長当時の所属】

北海道大学工学部

【現在の所属】

平成 6 年 3 月 停年退官

北海道電力株式会社

(おもしろ実験室)

【連絡先】

北海道北広島市山手町 7 丁目 4 - 1

TEL & FAX : 011-737-4339

E-mail : [H1994256@epmail.hepco.co.jp](mailto:H1994256@epmail.hepco.co.jp)

メッセージ

私が会長を仰せつかった第 29 期は、従来の「日本伝熱研究会」から、現在の「社団法人日本伝熱学会」への変革の始まった年でした。伝熱研究会という任意団体は、自由な雰囲気、しかもまとまりのあるとても良い団体でしたので、この団体のまま残すべきだというご意見も少なくなく、将来大きく発展し、また国際的にも認知されるためには法人組織の学会にすべきだとする方々との間で議論されました。結局、私が退任する最後の総会で、まずは各称のみを「日本伝熱学会」と変更することが決まりました。法人組織となるための申請手続きや定款整備などは、それ以降の役員の方々のご努力で進められましたが、大変な作業で今日の形が出来上がるまでには 2 ~ 3 年間を要したと記憶しております。当初の目的の通り、この学会が世界で認められる権威ある組織として益々発展して行くことを心より期待いたしております。

第30期会長  
30<sup>th</sup> President

小竹 進 先生  
Susumu KOTAKE

平成3年6月～平成4年5月

【会長当時の所属】 東京大学工学部  
【現在の所属】 無  
【連絡先】  
〒300-3565 茨城県結城郡八千代町松本 460

メッセージ

研究分野を同じくする任意な集まりの研究会から公的な団体組織としての学会へ移行してから約10年、その結果と将来への勾配がみえてくる時期になってきており、その移行にかかわった身としてはなにかと気にかかる。もともと、この移行は、伝熱という研究分野も一応論理体系が整ってきたので、この辺で今までの自由気楽な研究会の特徴を維持しながら、その研究結果と活動の独自の公的化をはかってもいいのではないかということを目指としている。しかし、一旦形ができるとどうしても形そのものを維持するのに力が入り、どうしてもその形ができたかという原点を忘れて、最初に‘形ありき’になりがちであるが、あくまで本質は中味であって、形はそれほど重要でない。もともと、学会への移行も、中味を優先にして形はそれに合わせればいいし、中味がなくなれば形は壊せばいいという柔軟な発想から出発している。

研究会発足当時の活気と気迫を残し、中味の充実さを目的として、それに合わせてできるだけ柔軟な形をとっていかうということは、歴史ある既成の大きな学会では無理であるかもしれない。しかし、熱という広いスペクトル分野の研究でかつ新進気鋭なたかだか1000人規模の小さな世帯の研究集団では大きな可能性があるとき期待した。研究会のときよりも形式的には充実した理事会や評議員会などでも、単なる学会の形の運営の討議で

なく、中味の研究の指導や討議に沸騰し、学会の研究の運営や指針に大きく貢献するものと期待された。小さな学会の事務的な運営なんて学会の貴重な会費と先生方の貴重な時間を浪費して議論するようなことでもなく（実際、このような会議には何の議論も意見もなく消極的に出席されている先生が多い）、それより先生方が日頃専門とする研究の議論や疑問の討議に花を咲かせたほうが、学会にとっても参加されている先生方にとってもはるかに楽しく意義深いものと思われるが、そのような話は聞かない。ここ10年、学会の形の立ち上げにたいへん苦勞された先生方には大きく感謝する一方で、だんだん形が出来上がっていくにつれて、ますます形式にとられ既成の学会に類似してくるとともに、本質である中味へ関心が薄くなっていくような気がするのが単なる杞憂であればよい。

もともと、‘熱’は形をとらないのが本質なのかもしれない。伝統ある伝熱シンポジウムだけを残せばよかったのかもしれない。このごろは、この伝熱シンポジウムも、若い先生たちでさえ自ら研究して自ら発表討論討議するという気迫にみちた雰囲気は少なくなり、討論のできない学生と紳士淑女の先生方の品のある研究(?)報告会というお祭り行事に近くなってしまったが...この特集でも先輩後輩たちがこうした学会の姿をどうみておられるか大きな関心事である。しかし、すべてのエネルギーの最終形態としての‘熱’は、世の全ての事象にかかわりをもち、地味ではあるがこれから避けて通れない、いやますますの研究を要求される研究分野である。でも、どうしても中味が充実しないのなら無理に形にこだわることなく形を壊せばよい。そもそも、こんな「歴代会長の...」などという企画も学会の形骸化の一端なのかもしれない。

第 3 1 期 会長  
31<sup>st</sup> President

藤江 邦男 先生  
Kunio FUJIE

平成 4 年 6 月 ~ 平成 5 年 5 月



---

【会長当時の所属】

新明和工業株式会社

【連絡先】

〒166-0004 東京都杉並区阿佐谷南 3-18-17  
TEL & FAX : 0463 - 61 - 4246

メッセージ

近年、わが国では大学・高専等の理工学系高等教育機関において、技術者教育の質的向上を図り、国際的に通用する技術者の能力を保証するために、技術者教育の国際同等性の確保が要求され、教育プログラムの改革が進行中である。この改革では、技術者が企業や諸団体等への所属有無に拘らず、個人として仕事が出来て自律ある人が期待されている。このような人物は、今のわが国で最も待望されている技術者で、個人としてリーダーシップがあり、例え企業に在ってもベンチャーに挑戦する企業家的技術者に外ならない。自己規律のないところには自由はなく、ベンチャー・ビジネスの成功には、先見性と責任を伴う自律が重要である。技術者は「和して同せず」を宗として、自ら適切な情報と創造的思考いよって、自らの意志で物事を選択し、責任をもって行為することが大切である。

終わりに、(社)日本伝熱学会の設立 40 周年を慶賀し、21 世紀における益益のご発展を衷心より、ご期待申し上げます。

第32期会長  
32<sup>nd</sup> President

棚澤 一郎 先生  
Ichiro TANASAWA

平成5年6月～平成6年5月



---

【会長当時の所属】

東京大学生産技術研究所

【現在の所属】 日本大学工学部

【連絡先】

〒963-8642 郡山市田村町徳定

日本大学工学部

TEL & FAX : 024 - 956 - 8779

E-mail : [tanasawa@mech.ce.nihon-u.ac.jp](mailto:tanasawa@mech.ce.nihon-u.ac.jp)

メッセージ

私の父は（棚澤 泰；第4期会長）は、伝熱研究には輝かしい未来は余り期待できないと考えていたようです。私もその影響を受け、大学院に進学するときには伝熱を敬遠しましたが、その後博士課程では、橋 藤雄 先生（第9期会長）のご指導の下で伝熱研究に従事することになってしまいました。

ただ私も、（伝熱研究が広く工学技術の基盤として重要なことは認めるにしても）今後大ブレイクすることはまずないだろうと思っています。もちろん、毎年の伝熱シンポジウムの盛況からもわかるように、伝熱研究のテーマが尽きてしまうことはないでしょうが、中身はますます細分化され小粒になっていき、多くは陳腐化していくものと思います。

研究者を目指す若い人から尋ねられたら、私は古典的な伝熱以外の分野を選択するよう勧めますが、どうしても伝熱にこだわるのであれば、バイオテクノロジーかナノテクノロジーの領域で新しい課題を見つけ出し挑戦していくよう助言したいと考えています。

第33期 会長  
33<sup>rd</sup> President

中山 恒 先生  
Wataru NAKAYAMA



平成6年6月～平成7年5月

---

【会長当時の所属】

東京工業大学

【現在の所属（略歴）】

ThermTech International

（日立製作所機械研究所技師長、東京工業大学  
工学部教授、メリーランド大学客員教授）

【連絡先】

神奈川県中郡大磯町東小磯 920 - 7

TEL & FAX : 0463 - 61 - 4246

E-mail : WatNAKAYAMA@aol.com

メッセージ

伝熱研究会の創成期における研究のミッションは、原子力プラントなど大規模システムの開発に必要な知識ベースを築くことにあった。伝熱現象の解明を目指して対流、相変化、輻射など様態別に研究が進められ、重厚な知識ベースが築かれた。研究会は知識の深化に重要な貢献をし、社団法人学会へと発展した。さて、40年の間に伝熱研究に対するニーズには質的な変化が生じた。エレクトロニクス、バイオ、ナノテクノロジーと新分野がめまぐるしく登場し、伝熱研究に新しい課題をもたらしている。これらの新課題は伝熱現象の基礎研究のみでは解決できないものばかりである。21世紀は異種知識の融合からブレークスルーが生まれる時代である。伝熱研究者が積極的に他分野の知識を吸収し複合科学研究のリーダーになることが、伝熱学会の更なる発展に不可欠であると思う。

第34期 会長  
34<sup>th</sup> President

相原 利雄 先生  
Toshio AIHARA

平成7年6月～平成8年5月



【会長当時の所属】

東北大学 流体科学研究所

【略歴】

- 1958年 東北大卒
- 1976年 東北大学流体科学研究所(当時高速力学研究所)教授
- 1981, 1985年 空気調和衛生工学会理事
- 1986年 第21回日本伝熱セミナー実行委員長
- 1987年 Editor for Experimental Thermal and Fluid Science
- 1988年 実験伝熱学・流体力学・熱力学世界会議連合副議長
- 1989年 日本機械学会理事
- 1989年 日本伝熱研究会(現伝熱学会)副会長
- 1990年 ICHMT Scientific Council 委員
- 1991年 JSME International Journal 編集長
- 1995年 第4回日米熱工学合同会議共同議長、日本伝熱学会会長
- 1995年 東北大学評議員
- 1997年 定年退職、東北大学名誉教授
- 1998年 Associate Editor for Applied Mechanics Reviews

【連絡先】

〒981-0961 宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘7-7-8  
TEL & FAX : 090-7936-1916, 022-217-5311  
E-mail : aihara@ifs.tohoku.ac.jp

メッセージ

1961年に発足した日本伝熱研究会が、欧米でも珍しい熱の専門学会として輝かしい足跡を重ね、40周年を迎えたことに、心からご祝詞申し上げます。

学会は1994年9月28日に文部省より社団法人の認可を受けたので、私は、公式会計年度の初頭から正味1年を担当した初の会長として、法人学会の運営を担わせて頂きました。当時は社会情勢上、本省が公益法人の実体把握と法規に則った運営を強く求めていた時代です。このため、研究会の頃の緩やかな運営に親しんだ会員の皆さんに意識改革を願い、法人としての運営を軌道にのせる事に腐心しました。法人化後の厳密な経理業務や会計報告などは、事務担当福会長のボランティアの奉仕では、到底対応し切れないと判断し、会計士との顧問契約を結んだのもその一環です。

最後に、科学技術は今日まで効率を追い続けてきましたが、今後は自然との調和に視点が移り、その質が問われる時代に入る事を指摘しておきます。

第35期会長  
35<sup>th</sup> President

越後 亮三 先生  
Ryozoh ECHIGO

平成8年6月～平成9年5月



---

【会長当時の所属】

東京工業大学工学部機械工学科

【現在の所属（略歴）】

芝浦工業大学工学部機械工学科

東京工業大学工学部機械工学科

同大学院修士課程

東京大学大学院博士課程修了

九州大学

東京工業大学を経て現在に至る。

【連絡先】

〒108 - 8548 東京都港区芝浦3 - 9 - 14

TEL & FAX : 03-5476-2404

E-mail : [echigo@sic.sibaura-it.ac.jp](mailto:echigo@sic.sibaura-it.ac.jp)

メッセージ

本学会の前身である日本伝熱研究会を立ち上げるために実質面でご苦勞された先生方は現在 80 歳前後になられ、既に物故者となられた方も多い。これらの先達は日本の伝熱研究を支えられた第 2 世代にあたり、学術、運営両面で活躍されたのは 40 歳前後であったことになる。現在の伝熱研究社会も高齢化していると痛感する。

研究者として過ごしてきた軌跡を手繰ってみると熱の研究以外に携わった仕事もすべて本学会に軸足を据え、京都開催の第 1 回シンポジウム以来ほとんど毎回出席し、研究発表も行い、討論を重ねてきた。実質的な研究生生活を終えてみて思うことは伝熱学会が自分にとって最も大切な学会であった。このことは先輩、同輩、後輩の非常に多くの人びとにも当てはまる不思議な求心力をもった学会である。私から伝熱学会を引くとほとんど何も残らないと思うと少し寂しくもある。

第36期会長  
36<sup>th</sup> President

長島 昭 先生  
Akira NAGASHIMA



平成9年6月～平成10年5月

---

【会長当時の所属】

慶應義塾大学理工学部機械工学科

【現在の所属】

慶應義塾大学システムデザイン工学科

【連絡先】

〒223-8522 横浜市港北区日吉 3-14-1

慶應義塾大学理工学部

TEL & FAX : 045-566-1736

E-mail : [nagasima@sd.keio.ac.jp](mailto:nagasima@sd.keio.ac.jp)

メッセージ

初めて参加した第2回シンポ以来の様々な出来事を思い出しますが、ここでは次の40年間を考える。

まず、暗い予測。日本の製造業は国際化の嵐にもまれて劣勢が常態となり、日本の大学や国研は厳しい評価と再編の波に長年痛めつけられて、工学者・技術者はうつむいて歩く。ではバラ色の方を。技術系専門大学院の強化や国際技術士資格の確立で、専門職としての技術者の社会的地位が向上して、技術者の国際的な流動性は増す。特許の権利が大幅に発明者に有利になり、技術者の億万長者が続出。最優秀な人々は競って技術系へ。

さてその中で伝熱分野は？ 伝熱はプロセスであるが、対象は無数の可能性を秘めている。対象には、エネルギー関連はもとより、ナノでもバイオでも生活関連でも、面白い研究のきっかけがたくさんある。プロセス一辺倒に閉じこもらないで、未来の対象に眼を広げ、胸のドキドキするバラ色の主流になりましょう。

第37期 会長

37<sup>th</sup> President

黒崎 晏夫 先生

Yasuo KUROSAKI

平成10年6月～平成11年5月



---

【会長当時の所属】

電気通信大学 電気通信学部

【現在の所属】

三井化学株式会社 研究開発部門

袖ヶ浦センター高分子研究所研究主幹

電気通信大学共同研究センター客員教授

【連絡先】

〒299-0265 千葉県袖ヶ浦市長浦 580-32

三井化学株式会社

袖ヶ浦センター 高分子研究所

Tel: 0438-64-2300, ext. 4011, Fax: 0438-64-2360

Email: [Yasuo.Kurosaki@mitsui-chem.co.jp](mailto:Yasuo.Kurosaki@mitsui-chem.co.jp)

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1

電気通信大学 共同研究センター

Tel/Fax: 0424-43-5812

Email: [kurosaki@crc.uec.ac.jp](mailto:kurosaki@crc.uec.ac.jp)

メッセージ

伝熱学会の前進である伝熱研究が発足したのは、伝熱学が原子力平和利用と宇宙開発を足掛かりにして発展を開始した時代である。機械工学科の多くの卒業生はエネルギー関連分野、また化学工学科の卒業生は石油化学関連分野の仕事に就くことを希望していた。

しかし、伝熱学が20世紀でもってある程度学問的には成熟してきた現在では、40年前とは状況は可成り異なって来ている。私自身は、伝熱学コミュニティの人々は、他の技術・学問分野に進出して伝熱工学的観点からの新しい切り口での発展に寄与しなければならないと考えている。このことは、自分が大学から他分野の企業に参加してみても益々その感を強くした。若い世代の方々が、伝熱学分野だけに囚われずに、他分野での伝熱学進展に貢献されることを強く望む次第である。多くの興味ある問題が無尽蔵に存在している。

第 3 8 期 会長  
38<sup>th</sup> President

鈴木 健二郎 先生  
Kenjiro SUZUKI

平成 11 年 6 月 ~ 平成 12 年 5 月



---

【会長当時の所属】

京都大学大学院工学研究科機械工学専攻

【現在の所属（略歴）】

昭和 37 年 3 月 京都大学工学部機械工学科卒業  
昭和 61 年 6 月 ~ 京都大学教授  
(工学部，大学院工学研究科)

【連絡先（勤務先）】

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学大学院工学研究科機械工学専攻  
Tel.075-753-5250, Fax.075-753-5851  
E-mail: [ksuzuki@mech.kyoto-u.ac.jp](mailto:ksuzuki@mech.kyoto-u.ac.jp)

メッセージ

数年前にも申しあげたように、日本伝熱学会にとって最も重要なことは、学生員も含む若い会員が、学会活動から刺激を受けることができる学会であり続けることだと思う。その点で、多数の学生諸君が参加する日本伝熱シンポジウムは、刺激につながる情報の発信場所として維持することが重要であるし、また昨年 7 月にキックオフした関東支部の「若手の会」などの仕掛け作りが、一つのポイントである。しかし、それ以上に重要なのは、各会員が、学会が関連する技術分野の中に、瑞々しい感性を持つ若手会員に刺激となりえる研究課題を見出して、彼らの目の前に広げて見せることであろう。また、社会全体がグローバル化していることからすると、日本伝熱学会の活動はそのまま世界の伝熱学界としての活動の一端であるべきであり、欲を言えば、上に言った若手会員への刺激とは、世界の若手会員への刺激であることを望みたいと思う。

第39期 会長  
39<sup>th</sup> President

福迫 尚一郎 先生  
Shoichiro FUKUSAKO

平成12年6月～平成13年5月



---

【会長当時の所属】

北海道大学大学院工学研究科

【現在の所属】

札幌市役所

【連絡先】

札幌市中央区北一条2丁目

TEL & FAX : 011-211-2004

E-mail : [shoichiro.fukusako@city.sapporo.jp](mailto:shoichiro.fukusako@city.sapporo.jp)

米国の新しい教育

米国の公立学校はこれまで、3 R's= 読み ( Reading )、書き ( Writing )、そして算術 ( Arithmetic )を柱に進められて来ました。それは、子供たちに価値観を植え付けるのでなく、自尊心や自己決定を重んじるという教育理念に基づいたものでした。しかし、学校が安全な場所でなくなり、金属探知機や銃規制が、教育の場で議論されねばならない事態になりました。それをきっかけに、4番目のR、尊敬 ( Respect ) や責任 ( Responsibility ) の頭文字に代表される人格教育が、新たな柱として加えられました。人格の六つの柱として『信頼』、『尊敬』、『責任』、『公正』、『思いやり』、そして

『市民的行為』を、定義しています。我が国では、新しい学習指導要領に対する議論が、盛んになされています。そのすべてが、子供たちの『学力』がどうなるのか、というスタンスによるものばかりです。米国ではとくに、『ゆとり教育』の失敗を経験し、読み、書き、算術を柱とした教育さえ超えて、さらなる方策にチャレンジしているのです。

第40期 会長  
40<sup>th</sup> President

藤田 恭伸 先生  
Yasunobu FUJITA

平成13年6月～平成14年5月



---

【会長当時の所属】

九州大学大学院工学府

【現在の所属】 同上

【連絡先】

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

TEL & FAX : 092-642-3471

E-mail : fujita@mech.kyushu-u.ac.jp

1961年に創立された「日本伝熱研究会」は、その後の学会活動の進展と社会的責任の拡大に対応すべく「社団法人日本伝熱学会」の設立(1994年)を経て、40期(2001年6月～2002年5月)を迎えました。創立の1961年は、1951年にスタートした「伝熱」に関する米英二国間討論集会在ボルダー(米国コロラド州)で開かれ、次回からは4年周期の「国際伝熱会議」として恒常化を決定した国際的に記念すべき年でもあります。爾来、伝熱分野における会員諸兄の国の内外での活発な学会活動は、ご承知の通りです。

さて、人生では40歳は「不惑」の年と言われております。あらゆる面で将来予測の容易でない今日、本会が目的としている「伝熱に関する学理と応用の発表、知識の普及、会員相互の交流、国際交流」を図り、「伝熱分野の学術の発展」に寄与すること、を今一度思い起こしながら、伝熱研究の拡大深化に信念をもって対処していきたいものです。

藤田 恭伸(九州大学)

新井紀男 教授を偲んで

*A Reminder of Our Deceased Friend: the Last Prof. Norio ARAI*

追悼

加藤征三（三重大学）  
*Seizo KATO (Mie University)*

新井紀男教授（名古屋大学高温エネルギー変換工学研究センター：RAN）には去る3月14日14時6分、心不全のため急逝されました。享年57歳でした。

新井教授の突然の悲報はにわかには信じがたく、打ちひしがれた思いは容易に消え去るものではありません。新井教授とは大学教養部での同級生という奇遇から公私共に長年悪友の付き合いだけだっただけに、この痛恨の極みを克服する手立ては見出せません。

新井教授は燃焼をはじめ主として反応を伴う熱流体現象を化学工学的視野から幅広く研究され、とくにケミカル・ガスタービンに象徴されるように独創的アイデアと社会貢献という信念に基づく先駆的熱技術の研究／開発を意欲的精力的に推進されました。彼の著した論文数の多さにまず驚かされます。それよりも最近の論文を読むと彼の「世のため人のため」という思いが伝わってきて、彼の真骨頂をみる思いがします。

著書も多いのですが、最近話題性の高いテーマについて自らは監修者となって多くの後輩諸氏をうまくまとめ上げ、それで各著者も業績がいただける、という気の利いた才をいかに発揮されています。これも、国内に留まらず、海外においても彼が監修者となった Advanced Energy Conversion Technology の洋書シリーズは海外へ日本のエネルギー／環境に関する研究／技術レベルの高さと研究者を知らせしめるといふ彼の企画才能をいかに発揮させた好例です。

学会のオーガナイザや研究会を主宰する際にも、それらの活動がやがて何らかの果実を生むように周到な気配りがなされていて、科研費や財団からの研究補助金や学会論文誌の特集号などによる論文掲載といった具体的な形として陽の目を見るのです。

RAN 主催の International Symposium on Advanced Energy Conversion and Related Technologies は彼の在任中3回も開催し、いずれも成功裏に終了しましたが、この成功裏というのは参加者数や採算はもちろん、審査に通った論文が ASME, AIAA, Energy といった一流ジャーナルに掲載されるとい点と IJPGC/ICOP/ECOS/WES などの国際会議と連携され次に繋がる点に裏づけされているのです。

このような成果の一端が10年時限付の名古屋大学高温エネルギー変換工学研究センターを拡大・改組に結実したものと確信しています。私どもが文部科学省へいろいろなセンター創設の概算要求へ出かけた折、RAN を見習うように、と指摘されるほど文科省でも彼の名が知れわたっており、正直驚きました。

学生の面倒見も尋常でなく、人材教育も教授の給料内だ、が口癖でした。例えば、海外へ学生を研究発表のため派遣する数の多さとか、ポート部（顧問）の学生のための真夜中菜園の水やりとか、数え挙げてみると彼の一途の心配り一つ一つに涙が止まりません。

彼には国内外、産官学問わず実に多くの仲間がいて、やがて彼が社長の会社を立ち上げるはずでした。

今想うと新井教授はほとんど24時間公人であり続けました。海外との直接連絡のため向こうの仕事時間にも起きている訳ですから、早朝の電話は当たり前でした。心安らかに熟睡することはなかったので、と心配でした。いくら強靱とはいえ限度がありますよ。

どうか、波穏やかな川辺に宝物の孫とポートを遊ばせ、好きな油絵を楽しんでください。心ゆくまで。

合掌

追悼 笹口健吾助教授

*In Memoriam of Associate Professor Kengo SASAGUCHI*

井村 英昭 (熊本大学)

*Hideaki IMURA (Kumamoto University)*

熊本大学工学部知能生産システム工学科笹口健吾助教授は平成14年2月1日の早朝7時半頃、窓ガラスを清掃中、研究棟4階から転落し、急逝されました。享年49歳でありました。学内の美化に従事中の事故であり、誠に痛ましかぎりでありました。

笹口助教授は長崎県佐世保南高等学校から熊本大学工学部に進学され、昭和50年3月に卒業されました。さらに、熊本大学大学院工学研究科修士課程資源開発工学専攻を昭和52年3月に修了された後、九州大学大学院工学研究科博士課程動力機械工学専攻に進学、昭和55年3月同課程を単位取得退学後、直ちに母校である熊本大学工学部機械工学科助手に就任されました。翌昭和56年7月には九州大学から工学博士の学位を授与されております。昭和58年4月熊本大学講師に、昭和60年12月同大学助教授に昇任され、昭和63年の改組に伴って、知能生産システム工学科助教授になり、現在に至っております。

その間、昭和61年10月から10ヶ月間文部省在外研究員として、アメリカの名門大学であるパデュー大学に留学されております。昭和63年4月からは熊本大学大学院自然科学研究科を兼任され、また、平成12年4月からは熊本大学大学教育センター研究部教官も併任されておりました。平成12年11月には熊本大学勤続20年の表彰を受けられました。熊本大学に奉職されて以来、これまで、22年の長きにわたり、誠心誠意教育・研究に精励されてきました。

教育面では、熱力学第一、伝熱工学、熱エネルギー変換工学、数値解析及び演習など、専門の熱工学関連の科目を中心に講義、実験、演習科目を担当さ

れ、熱意あふれる講義は多くの学生に深い感銘を与えました。先生の指導を受けた卒業生は産業界などで、すでに社会の中堅として活躍しております。

研究面では、博士論文は「超音速内部流動に及ぼす擬似衝撃波の影響」でありましたが、熊本大学就任後は、昭和56年度から「固液相変化を伴う系の熱伝達と流動」及び「閉領域内の自然対流」を中心に非常に活発な研究を行って、数多くの論文及び国際会議発表を行ってこられました。最近、夏期日中の電力需要の急速な増大を抑制するために、電力会社等で注目されている氷蓄熱技術の確立とコンパクトな氷蓄熱装置の研究開発に精力的に取り組み、産学連携研究を積極的に展開させていただきに、この不幸は単に学問の進展だけでなく、社会にとっても大きな損失であると考えます。

学会等における活動では、日本機械学会校閲委員、日本冷凍空調学会校閲委員、その他、福岡県オゾン水利用研究会委員、熊本県ビル空調研究会委員など、第一線の研究者として、また熱関係の専門家として活躍し、貢献してこられました。平成9年には日本機械学会論文校閲感謝表彰を受けておられます。

笹口助教授は上記のように教育・研究に専念・努力してこられました。これからという時期に、途半ばにして急逝されたことは誠に無念であったと推察致します。我々としてもまったく残念であります。ご遺族には奥様、長男及び長女がおられますが、この突然のご不幸に、その悲嘆・悲痛はいかばかりかと計り知れないものがあります。弔慰の言葉もないほどです。ここに、謹んでご冥福をお祈り致します。

東海支部活動報告  
Report of Tokai Branch

桑原 不二郎 (静岡大学)  
Fujio KUWAHARA (Shizuoka University)

< 第 7 回伝熱コロキウム >

日 時：平成 14 年 3 月 26 日 (火) 13:15 ~ 16:30  
場 所：アクトシティ浜松 研修交流センター  
参加者：35 名  
話題提供：3 件

( 1 ) 自動車のエンジンルーム内熱流体解析

渡辺 敏夫

(スズキ(株)実験グループ第4グループ)

エンジンルーム内の空気の流れは、ラジエタの放熱性能やエンジンルーム内の冷却に大きく影響をする。一方、エンジンルームへの流入空気量やエンジンルームの下の流れは、空力特性に影響を及ぼす。これらの性能を評価するために、車両開発の初期段階に実施するエンジンルーム内熱流体解析の例を紹介する。

( 2 ) R407C 対応パッケージエアコンの開発

七種 哲二

(三菱電機(株)住環境研究開発センター空調

技術開発部)

従来のR22冷媒パッケージエアコンにR407C冷媒をドロップインすると、COPが7~10%低下し、冷媒循環組成も運転によって変化する。そこで、冷凍サイクルの高効率化と組成変化抑制を目的としてR407C対応新冷媒回路であるアキュムレシーバ回路を開発し、R22同等レベルのCOP改善と、循環組成の安定化を図った。

( 3 ) ペルチェ素子冷却デバイスによるレーザー発振器の冷却"

桑原不二郎(静岡大学工学部機械工学科)

情報ネットワークにおける主要なデバイスであるレーザー発信機は、その出力特性並びに周波数特性により厳密な温度管理が必要となる。発信機の冷却においては、高度の温度制御が可能であり、応答性の良さが要求されることからペルチェ熱電素子がよく用いられてはいるが、その特性には未だ不明の点がある。その特性を数学的に表現し、数値解析の境界条件に取り込む試みについて紹介する。

< 東海支部事業報告 >

東海支部総会・特別講演会・見学会  
日時：平成 14 年 4 月 26 日 (金) 14:00 ~ 16:40  
会場：大同特殊鋼株式会社知多工場  
(本館 101 会議室)

参加者：49 名

・総会内容：

1. 第 7 期事業報告
2. 第 7 期決算報告

3. 第 8 期役員の承認
4. 第 8 期事業計画
5. 第 8 期予算案
6. その他

・特別講演会：

講演題目：大同特殊鋼の製鋼プロセスについて  
講 師：天野 肇  
(大同特殊鋼知多工場製鋼室 室長)

・見学会：連続鋳造プロセス等を見学

花村 克悟 (岐阜大学)

東北支部活動報告  
Report of Tohoku Branch

橋爪 秀利 (東北大学)  
Hidetoshi HASHIZUME (Tohoku University)

第2回日本伝熱学会学生発表会

本発表会は、最近益々重要性を増してきている伝熱研究の将来を担う若手の学生に発表と討論の機会を与え、研究者・技術者として堅実に成長する機会を設けるべく昨年度から企画された発表会です。本年度は下記5件の発表とともに、活発な討論が行われました。なお、本年度の優秀プレゼンテーション賞には安部井 淳君(東北大院)が選出され、同日開催されました東北支部総会懇親会の席上にて賞の贈呈が行われました。

主催：日本伝熱学会東北支部

共催：日本伝熱学会学生委員会、東北伝熱懇話会

日時：平成14年4月25日(木)13:00~14:40

場所：東北大学流体科学研究所大講義室

プログラム

1. 水素吸蔵合金の劣化機構の解明  
宮内信輔(東北大院), 朝熊裕介, 山本剛, 青木秀之, 三浦隆利
2. 住宅換気用対向流形熱交換器の流動観察および性能評価  
狩谷真太郎(東北大院), 酒井清吾(東北大流体研), 円山重直
3. 海洋での人工湧昇による管内極低速流の計測に関する研究  
椿耕太郎(東北大院), 酒井清吾(東北大流体研), 円山重直, 平啓介(東大海洋研)
4. 多孔質体を用いた高熱負荷除去に関する気液二相熱流動解析  
安部井淳(東北大院), 結城和久(東北大), 高橋昌伸(富士総合研究所), 戸田三郎(東北大)
5. 溶融現象を伴う充填層における気固間熱伝達の解析  
小野竜一(東北大院), 後藤晃権, 山本剛, 青木秀之, 三浦隆利

平成13年度(第40期)支部総会・春季講演会  
去る4月25日(木)東北大学流体科学研究所にて平成13年度東北支部総会が開催されました。その席上にて太田照和支部長をはじめ次期支部役員が選出されました。引き続き、春季講演会が開催され、お

二人の先生にご講演をいただきました。新堀先生には高レベル放射性廃棄物の地層処分に関し厳密な数値シミュレーションに基づく安全性評価法について、また埜上先生には高炉からのCO<sub>2</sub>排出量削減に向けての改善法の有効性を数値シミュレーションにより示していただき、大変興味深い貴重なお話を拝聴することができました。お二人の先生には厚く御礼申し上げます。

日時：平成14年4月25日(木)14:40~17:30

場所：東北大学流体科学研究所大講義室

参加者：23名

1. 支部総会

- 1)平成13年度(第40期)事業報告
- 2)平成13年度(第40期)会計報告
- 3)平成13年度(第40期)監査報告
- 4)平成14年度(第41期)役員改選
- 5)平成14年度(第41期)事業計画案
- 6)その他

2. 平成14年度支部役員

支部長：太田照和(東北大)

副支部長：小川 清(日大), 横山孝男(山形大)

幹事(評議員): 稲村隆夫(弘前大), 菅原征洋(秋田大), 栗山雅文(山形大), 小原拓(東北大)

幹事:

青森地区 鎌田長幸(八戸高専), 大黒正敏(八戸工大)

秋田地区 佐々木章(秋田高専), 赤松正人(秋田県立大)

岩手地区 藤田尚毅(岩手大), 星 朗(一関高専)

山形地区 原田英二(山形大), 奥山正明(山形大)

宮城地区 結城和久(東北大), 泉正明(宮城高専)

福島地区 高橋章(福島高専), 東之弘(いわき明星大)

監事: 島田了八(石巻専修大), 高橋修一(東北電力)

3. 講演会

参加者：33名

- 1) 地下不均質媒体における移動現象について - 高レベル放射性廃棄物地層処分の安全評価に関連して

新堀雄一 (東北大学大学院工学研究科)

- 2) 地球温暖化ガス低減のための高炉内移動現象のシミュレーション

埜上 洋(東北大学多元物質科学研究所)

行事カレンダー

本会主催行事

開催日		行事名(開催地,開催国)	申込締切	原稿締切	問合せ先	掲載号
2002年						
6月	5日(水) ~ 7日(金)	第39回日本伝熱シンポジウム (北海道厚生年金会館、札幌市)	'02.1/18 (講演申込) '02.4/12 (参加事前 申込)	'02.3/15	第39回日本伝熱シンポジウム実行委員会 北海道大学大学院工学研究科機械科学専攻内 Fax:011-706-7889 E-mail:htsymp39@mech-me.eng.hokudai. ac.jp	'01.11
2003年						
5月	28日(水) ~ 30日(金)	第40回日本伝熱シンポジウム (広島国際会議場、広島市)	未定	未定		

本会共催,協賛行事

開催日		行事名(開催地,開催国)	申込締切	原稿締切	問合せ先	掲載号
2002年						
6月	7日(金)	02-2 ポリマーフロンティア 21 (東京工業大学百年記念館フェライト会議室)			高分子学会 02-2 ポリマーフロンティア 21 係 Fax:03-5540-3737	
6月	20日(木) ~ 21日(金)	日本機械学会関西支部第255回講習会 「破壊力学の基礎と最新応用 (実験実習・計算演習付き)」 (島津製作所三条工場研修センター)	'01.6/7 (定員 100 名)		(社)日本機械学会 関西支部 Tel:06-6443-2073, Fax:06-6443-6049 E-mail:jsme@soleil.ocn.ne.jp http:// /www.jsme.or.jp/ks/	
7月	22日(月) ~ 24日(水)	第30回可視化情報シンポジウム (工学院大学 新宿校舎)	'02.3/1	'02.5/10	(社)可視化情報学会 Tel:03-5993-5020, Fax:03-5993-5026 E-mail: info@vsj.or.jp http://www.vsj.or.jp/symp2002	
7月	23日(火) ~ 25日(木)	日本流体力学会 年会 2001 (主テーマ: 21世紀の流体力学) (仙台国際センター)	'02.3/29	'01.6/7	日本流体力学会年会 2002 運営委員会 〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学流体科学研究所衝撃波研究セ ンター内 Tel/Fax:022-217-5285/5284 E-mail:ryu2002@ifs.tohoku.ac.jp http://nenkai02.fluid.mech.tohoku. ac.jp/	
7月	29日(月) ~ 31日(水)	混相流シンポジウム 2002 (名古屋大学)	'02.3/29	'02.5/31	〒464-8603 名古屋市千種区不老町 名古屋大学工学研究科分子科学工学専攻 坂東芳行 Tel:052-789-3622, Fax:052-789-3272 E-mail:bando@nuce.nagoya-u.ac.jp	
8月	26日(月) ~ 29日(木)	第10回流れの可視化国際シンポジウム 10 <sup>th</sup> International symposium on Flow Visualization (ISFV10) (京都国際会議場)	'02.1/31	'01.5/31	ISFV10 事務局・論文委員会委員長 川橋正昭(埼玉大学) RAN2001 事務局(総務担当古畑朋彦) Tel:048-858-3443, Fax: 048-858-3711 E-mail:mkawa@mech.saitama-u.ac.jp	
9月	5日(木) ~ 7日(土)	日本機械学会流体工学部門集中講義 [流体・粒子 混相流入門] (大阪工業大学)	'02.8.25 (着金)		〒565-0871 吹田市山田丘 2-1 大阪大学 工学研究科機械物理工学専攻 辻 裕 Tel & Fax: 06-6879-7315 E-mail:tsuji@mech.eng.osaka-u.ac.jp	
10月	9日(水) ~ 11日(金)	第18回睡眠環境シンポジウム (横浜国立大学)	'02.7/10	'02.8/10	横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5 横浜国立大学大学院環境情報研究院 人工環境と情報部門内 Tel:045-339-3888, Fax:045-331-6143 E-mail:sse@ynu.ac.jp	
11月	7日(木) ~ 8日(金)	(社)日本機械学会 2002年度熱工学講演会 (琉球大学)	'02.6/14	'02.8/16	沖縄県西原町千原 1 琉球大学工学部機械システム工学科 長田孝志 Tel:098-895-8612, Fax:098-895-8636 http://www.jsme.or.jp/tesd/	
11月	21日(水) ~ 23日(金)	第40回燃焼シンポジウム (グランキューブ大阪 大阪国際会議場)	'02.7/19	'02.9/24	第40回燃焼シンポジウム事務局 大阪市立大学大学院工学研究科エネルギー ギ-機械工学分野内 Tel:072-254-9225, Fax: 072-254-9225 E-mail:sympo40@bosei.combustionsoc iety.jp	

行事カレンダー

2003年					
6月	25日(水) ~ 27日(金)	第3回乱流・剪断流現象国際シンポジウム Third International Symposium on Turbulence and Share Flow Phenomena	'02.8(Abst ract 切)		東京都目黒区大岡山 2-12-1 東京工業 大学大学院理工学研究科機械宇宙シス テム専攻宮内敏雄 Tel/Fax:03-5734-3183E-mail:tmiyauc h@mes.titech.ac.jp
11月	2日(日) ~ 7日(金)	International Gas Turbine Congress 2003 TOKYO 8 <sup>th</sup> Congress in Japan (江戸川総合区民ホール)	'01.5/31	'02.2/1	The Gas Turbine Society of Japan 7-5-13-402Nishi-Shinjuku, Shinnjuku-ku, Tokyo 160-0023, Japan Fax:+81-3-3365-0387 E-mail:igt@nal.go.jp
11月	9日(日) ~ 13日(木)	International Conference on Power Engineeing-03, Kobe 2003年 動力エネルギー国際会議神戸大会 (神戸国際会議場)	'02.3	'03.3	東京都新宿区信濃町 35 信濃町煉瓦館 (社)日本機械学会総合企画グループ 高橋正彦 Tel:03-5360-3505
12月	1日(月) ~ 3日(水)	マイクロエンジニアリングに関する国際シンポ ジウム - 熱流体・信頼性・メカトロニクス - (日立製作所機会研究所、土浦市、 産業技術総合研究所、つくば市)	'02.3 Abstract	'02.8 Full Paper	東京都新宿区信濃町 35 信濃町煉瓦館 (社)日本機械学会総合企画グループ 高橋正彦 Tel:03-5360-3505

国際会議案内

開催日	行事名(開催国,開催地)	申込締切	原稿締切	問合せ先	掲載号
2002年					
7月	14日(日) ~ 18日(木)	The 13 <sup>th</sup> International Symposium on Transport Phenomena(ISTP-13) (カナダ, Convention Center, Victoria, BC)	'01.11/1 (Abstract)	'02.3/1	Dr.Sadic Dost, ISTP13, Dept. of Mech. Eng., Univ. of Victoria, BC, Canada, V8W 3P6 <a href="http://www.istp13.uvic.ca">http://www.istp13.uvic.ca</a>
8月	18日(日) ~ 23日(金)	第12回 国際伝熱会議 (フランス, グルノーブル)		'01.10/1	東京大学大学院工学系研究科 機械工学専攻 庄司正弘 Tel & Fax:03-5800-6987 E-mail:shoji@photon.t.u-tokyo.ac.jp <a href="http://www.ihtc12.ensma.fr/">http://www.ihtc12.ensma.fr/</a>
2003年					
3月	16日(日) ~ 20日(木)	The 6th ASME-JSME Thermal Engineering Conference	'02.3/29(A bstract)	'02.6/14	西尾茂文(東京大学生産技術研究所) E-mail:nishios@iis.t.u-tokyo.ac.jp 佐藤 勲(東京工業大学大学院) E-mail:sato@mep.titech.ac.jp

「伝熱」会告の書き方

## 事務局からの連絡

## 1. 学会案内と入会手続きについて

## 【目的】

本会は、伝熱に関する学理技術の進展と知識の普及、会員相互及び国際的な交流を図ることを目的としています。

## 【会計年度】

会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日までです。

## 【会員の種別と会費】

会員種	資格	会費(年額)
正会員	伝熱に関する学識経験を有する者で、本会の目的に賛同して入会した個人	8,000円
賛助会員	本会の目的に賛同し、本会の事業を援助する法人またはその事業所、あるいは個人	1口 30,000円
学生会員	高専、短大、大学の学部および大学院に在学中の学生で、本会の目的に賛同して入会した個人	4,000円
名誉会員	本会に特に功労のあった者で、総会において推薦された者	8,000円 但し、70才以上は0円
推薦会員	本会の発展に寄与することが期待できる者で、当該年度の総会において推薦された者	0円

## 【会員の特典】

会員は本会の活動に参加でき、次の特典があります。

- 「伝熱」「THERMAL SCIENCE AND ENGINEERING」を郵送します。  
(本年度発行予定：5, 7, 9, 11, 1, 3月号)  
・正会員、学生会員、名誉会員、推薦会員に1冊送付  
・賛助会員に口数分の冊数送付

- 「日本伝熱シンポジウム講演論文集」を無料でさしあげます。

- ・正・学生・名誉・推薦の各会員に1部、賛助会員に口数分の部数(但し、伝熱シンポジウム開催の前年度の3月25日までに前年度分までの会費を納入した会員に限る)

## 【入会手続き】

正会員または学生会員への入会の際は、入会申込用紙にご記入の上、事務局宛にファックスまたは郵送で送り、郵便振替にて当該年度会費をお支払い下さい。賛助会員への入会の際は、入会申込用紙にご記入の上、事務局宛にファックスまたは郵送でお送り下さい。必要があれば本会の内容、会則、入会手続き等についてご説明します。賛助会員への申込みは何口でも可能です。

## (注意)

- ・申込用紙には氏名を明瞭に記入し、難読文字にはJISコードのご指示をお願いします。
- ・会費納入時の郵便振替用紙には、会員名(必要に応じてフリガナを付す)を必ず記入して下さい。会社名のみ記載の場合、入金の手配ができず、会費未納のままとなります。
- ・学生会員への入会申込においては、指導教官による在学証明(署名・捺印)が必要です。

## 2. 会員の方々へ

## 【会員増加と賛助会員口数増加のお願い】

個人会員と賛助会員の増加が検討されています。会員の皆様におかれましても、できる限り周囲の関連の方々や団体に入会をお誘い下さるようお願いいたします。また、賛助会員への入会申込み受付におきまして、A(3口)、B(2口)、C(1口)と分けております。現賛助会員におかれましても、できる限り口数の増加をお願いいたします。

## 【会費納入について】

会費は当該年度内に納入してください。請求書はお申し出のない限り特に発行しません。会費納入状況は事務局にお問い合わせ下さい。会費納入には折込みの郵便振替用紙をご利用下さい。その他の送金方法で手数料が必要な場合には、送金者側の負担にてお願い致します。フリガナ名の検索によって入金の手務処理を行っておりますので会社名のみで会員名の記載がない場合には未納扱いになります。

【変更届について】

(勤務先、住所、通信先等の変更)

勤務先、住所、通信先等に変更が生じた場合には、巻末の「変更届用紙」にて速やかに事務局へお知らせ下さい。通信先の変更届がない場合には、郵送物が会員に確実に届かず、あるいは宛名不明により以降の郵送が継続できなくなります。また、再発送が可能な場合にもその費用をご負担頂くことになります。

(賛助会員の代表者変更)

賛助会員の場合には、必要に応じて代表者を変更できます。

(学生会員から正会員への変更)

学生会員が社会人になられた場合には、会費が変わりますので正会員への変更届を速やかにご提出下さい。このことにつきましては、指導教官の方々からご指導をお願いします。

(変更届提出上の注意)

会員データを変更する際の誤りを防ぐため、変更届は必ず書面にて会員自身もしくは代理と認められる方がご提出下さるようお願いいたします。

【退会届について】

退会を希望される方は、退会日付けを記した書面にて退会届(郵便振替用紙に記載可)を提出し、未納会費を納入して下さい。会員登録を抹消します。

【会費を長期滞納されている方へ】

長期間、会費を滞納されている会員の方々は、至急納入をお願いします。特に、平成12年度以降の会費未納の方には「伝熱」「THERMAL SCIENCE AND ENGINEERING」の送付を停止しており、近く退会処分が理事会で決定されます。

3. 事務局について

次の業務を下記の事務局で行っております。

事務局

《業務内容》

- )入会届、変更届、退会届の受付
- )会費納入の受付、会費徴収等
- )会員、非会員からの問い合わせに対する対応、連絡等
- )伝熱シンポジウム終了後の「講演論文集」の注文受付、新入会員への学会誌「伝熱」、論文集「THERMAL SCIENCE AND ENGINEERING」発送、その他刊行物の発送
- )その他必要な業務

《所在地》

〒113-0034 東京都文京区湯島2-16-16

社団法人 日本伝熱学会

TEL, FAX: 03-5689-3401

E-MAIL: [htsj@asahi-net.email.ne.jp](mailto:htsj@asahi-net.email.ne.jp)

HP: <http://www.htsj.or.jp>

(土日、祝祭日を除く、午前10時～午後5時)

(注意)

1. 事務局への連絡、お問い合わせには、電話によらずできるだけ郵便振替用紙の通信欄やファックス等の書面にてお願いします。
2. 学会事務の統括と上記以外の事務は、下記にて行なっております。

〒184-8588 東京都小金井市中町2-24-46

東京農工大学工学部機械システム工学科

望月 貞成

TEL:042-388-7088 FAX:042-388-7088

E-Mail: [motizuki@cc.tuat.ac.jp](mailto:motizuki@cc.tuat.ac.jp)

---

日本伝熱学会正会員・学生会員入会申込み・変更届用紙

---

日本伝熱学会 賛助会員新規入会申込み届け用紙

広告

Leading Edge the Thermal Technology

## 編集後記

伝熱学会40周年記念号シリーズの第3段「歴代会長特集号」をお届けします。本号は西村・一宮委員の担当で、発行することができました。原稿執筆いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

本誌への原稿の投稿、また、本誌に対するご意見・ご要望など、お近くの下記委員ないしは編集出版事務局までお寄せください。

---

### 第40期編集出版部会委員

副会長	河村 洋	東京理科大学
部会長	瀧本 昭	金沢大学
委員		
(理事)	山田雅彦	北海道大学
	花村克悟	岐阜大学
	岩城敏博	富山大学
	牧野俊郎	京都大学
	西村龍夫	山口大学
(監事)	太田照和	東北大学
(評議員)	塚田隆夫	東北大学
	井上剛良	東京工業大学
	一宮浩市	山梨大学
	鈴木 洋	神戸大学
	高田保之	九州大学
(事務)	大西 元	金沢大学
TSE チーフエディター		
	西尾茂文	東京大学
TSE 出版担当		
	永井二郎	福井大学

平成 14 年 5 月 17 日

編集出版事務局：〒920-8667 金沢市小立野 2-40-20  
金沢大学工学部人間・機械工学科  
瀧本 昭 / 大西 元  
Tel : 076-234-4741 / -4742  
Fax : 076-234-4743  
e-mail: [takimoto@t.kanazawa-u.ac.jp](mailto:takimoto@t.kanazawa-u.ac.jp)

## 複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、著作権者から複写権等の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。なお、著作物の転載・翻訳のような複写以外許諾は、直接本会へご連絡下さい。

〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-41 乃木坂ビル 3F  
学術著作権協会 (Tel / Fax : 03-3475-5618)

アメリカ合衆国における複写については、次に連絡して下さい。

Copyright Clearance Center, Inc.(CCC)  
222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA  
Phone : +1-978-750-8400 Fax : +1-978-750-4744

### Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission from the following organization which has been delegated for copyright for clearance by the copyright owner of this publication.

Except in the USA

The Copyright Council of the Academic Societies (CCAS)  
41-6 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan  
Phone / Fax : +81-3-3475-5618

In the USA

Copyright Clearance Center, Inc. (CCC)  
222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA  
Phone : +1-978-750-8400 Fax : +1-978-750-4744

## 伝 熱

ISSN 1344-8692

Journal of The Heat Transfer Society of Japan  
Vol. 41, No. 168

2002 年 5 月発行

発行所 社団法人 日本伝熱学会  
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-16-16  
電話 03(5689)3401  
Fax. 03(5689)3401  
郵便振替 00160-4-14749

Published by

The Heat Transfer Society of Japan  
16-16, Yushima 2-chome, Bunkyo-ku,  
Tokyo 113-0034, Japan  
Phone / Fax : +81-3-5689-3401